

La Revuo Orienta



JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

ŜIN'OGAŬAMAĈI III, UŜIGOME, TOKIO



目次	編輯者	大島 義夫
Zamenhof と Naciismo	大島 義夫	97
ザメンホフ小論	平岡 昇	98
Zamenhof の思い出	中村 正一	100
言語の本質とエスペラント	小泉 潔	102
SAT 運動の意義とその現勢	和田 一郎	104
如何なる國際語が理想的か	岡本 好次	106
自慢くらべ	川崎 直一	108
新刊紹介	大島 義夫	109
初等講座 La paŝtistino	吉野 櫻雄	110
中等講座 Patro (Ĉehov)	松本 清彦	112
Apud laboristino k. e. (原作詩)	小泉 潔	114
Tradukoj de kelkaj Haiku	”	115
Al Eŭropaj Esperantistoj		115
1930		116
朝鮮短篇小説集	金 億	118
史劇「グラシヤ」	藤澤 古雪	119
海外報道	伊藤 己酉三	122
内地報道		124
編輯者のページ		123
(表紙) 花ざかり	露木 清彦	

★ 中等講習會

時日 金曜日午後七時より學會にて(隨時入會可)

會費 月額金五十錢

★ 例會兼研究會

毎水曜日午後七時より Hamleto 研究

會費不用

★ 會話會

4月19日午後七時より(第三土曜)丸の内鐵道俱樂部(市電永樂町下車日活本社を南へ右に折れる丸之内ホテルの眞後)に於て。

話者 理研研究員吉城忠正氏の falsita papermono の化學的研究についての興味深い話あり。

會費金五錢

昨年度レヴオの目錄(謄寫版刷)が出來ました、希望者は二錢切手封入御申込下さい。

Zamenhof と Naciismo

世界に國を持たず、到る所で人々に迫害されていたユダヤ人の中の esp-isto たちが nacia grupo を組織しようとして、1914 年世界大戦の直前 Zamenhof にその参加を求めた。

Zamenhof も等しくユダヤ人であり、自分と血を同じくする人々が迫害され蔑視されている有様を、小さい時から充分に承知していた。そして Zamenhof は民族間の正義と平等と友愛の實現を以て homaranisto の終極の目的としていたことを言うまでもない。

が Hebreja Ligo Esp-ista の創立準備に與ることを求められて Zamenhof は何と言ったか？

“Mi mem bedaŭrinde devas stari flanke de la afero, ĉar laŭ miaj konvinkoj mi estas ‘homarano’, kaj mi ne povas ligi min kun la celado kaj idealoj de speciala gento aŭ religio. Mi estas profunde konvinkita, ke ĉiu nacionalismo prezentas por la homaro nur plej grandan malfeliĉon, kaj ke la celado de ĉiuj homoj devus esti: krei harmonian homaron. Estas vero, ke la nacionalismo de gentoj premataj — kiel natura sindefenda reago — estas multe pli pardoninda, ol la nacionalismo de gentoj premantaj; sed, se la nacionalismo de fortuloj estas nenobla, la nacionalismo de malfortuloj estas neprudenta; ambaŭ naskas kaj subtenas unu la alian, kaj prezentas eraran rondon de malfeliĉoj, el kiuj la homaro neniam eliros…… Tio estas la kaŭzo, pro kiu mi, malgraŭ la korŝirantaj suferoj de nia gento, ne volas ligi min kun hebrea nacionalismo, sed mi volas labori nur por interhoma justeco absoluta. Mi estas profunde konvinkita, ke per tio mi alportos al mia malfeliĉa gento multe pli da bono, ol per celado nacionalisma ……”

世界に到る所で虐げられ、住むべき故國もなく放浪している自分と同じ血を分けたユダヤ人の esp-istoj の結合に對して参加拒絶を斷

乎と言ひ放つた Zamenhof を見て、われわれ如何にも徹底した眞の esp-isto の姿に接し得たと感じ得られるでわないか。Esp-isto が單なる一人工語を弄び知的遊戯に耽けるものでない以上、又單に實際上の利便を充たし得ることだけに満足して止るべきものでない以上、Zamenhof のこの言ひ、われわれにとつて大きな關心事でなければならない。

更に彼は世界大戦たけなわになつた 1915 年、彼の最後の論文 “Post Granda Milito, Alvoko al Diplomatoj” なる一文を草して、戦後の世界を處理すべき使命を持つ外交官らに訴えて、その平和に到るべき手段をはつきりと提示した。

その提案の原則として示されたものの次の句に充分盡されている。

“Ĉiu lando morale kaj materiale, plene egalrajte apartenas al ĉiuj siaj filoj.”

以上の引用——しかも彼が 1917 年 4 月に死ぬ前に遺した文獻からの——は彼の homaranisto として抱いていた naciismo を充分な姿でわれわれに示している。戦後急激に變化した世界情勢はもちろん彼の主張の絶對性を認めない。が homaranisto としての彼の naciismo の發展の internacia skalo から sennacia skalo へと即ち sennaciismo へと歩みを近づけ來つゝあるのを知る。彼にして更に數年の生を得、戦後に於ける世界情勢の進展を視得たならば、彼の抱く naciismo に對する見解わたしかに sennaciismo — 揚棄された homaranismo へと移り得たであろうことをわれわれ充分推測し得る。

今や各國、生産力の過度の膨張に悩み、國內に失業者が溢れ、互に關稅の障壁を高め、再び戦争の危機が迫りつゝある時、Zamenhof の死を偲ぶとともに彼の naciismo を知り、その精神を理解すること、現在の esp-istoj にまつて無益なことでわれないことを信ずる。

(大島義夫)

ザメンホフ小観

平 岡 昇

ある日、エスペラントとザメンホフとに就いて少しも豫備知識を持たない友に、ザメンホフの肖像を見せて、その偽らざる印象を求めた。

「まあ、田舎巡りの喜劇役者か、善良な村長さんだね。」

友は、微笑しながら、答へた。

凡そ、有名な人物の肖像と云ふものは、殆んど常にある共通な雰圍氣を持つてゐる。つまり一種のヘロイスマである。だが、不幸にして、否、事實は幸ひにして、我がザメンホフのそれは、さう云ふ虚飾を微塵だに持たない。われわれの眼前に在る寫眞の中のポーランドの貧寒な眼科醫ザメンホフは、いつまでもあの小心で善良で、正直でそして情熱的な好々爺だ。彼に對してはドクトーロの稱號すら、無用の贅物としか思はれない。

エスペラント界で、ザメンホフをマイストロと呼ぶ習慣がいつか行はれてゐた。だが、これはザメンホフ自身も頑強に固辭してゐたやうに、全く無意味な虚禮だつた。マイストロと呼ばれるためには、われわれの友ザメンホフは、教祖的な人工的尊嚴から餘りに遠く隔つてゐたからだ。なのに、ザメンホフの偉大さが、少くともエスペラント界では、過去に於いて屢々偶像的な後光を帯びてゐたことは、否定できない。これは嗤ふべき矛盾である。けれども、價值を過大に見積ることが偶像化を意味するとすれば、われわれエスペランティストのザメンホフ觀は、いつも偶像化の危険に曝されてゐる譯だ。たゞ、恐らく歴史の觀點を見失はない限り、われわれのザメンホフ觀も、さまで正鵠を失することはなからうと思ふ。

ザメンホフの偉大さ、近代の文化史の中で占める彼のユニークな地位に就いては、國際語の運動を肯定するわれわれは、夙に明白に識つてゐる。アメリカが再び發見されないやうに、ザメンホフの努力の結晶であるエスペラントとエスペラント運動とは、ザメンホフの名を不朽にするだらうことは疑ひない。けれども今までザメンホフの偉大を形作る個々の要素に關するわれわれの知識は、さまで深く又、正しくはなかつた。なる程、彼の言語學的知識に關する研究は、今日まで可成に詳細に行はれて來た。併し、社會人としての

彼の思想、又科學者としての彼の科學思想などに就いては、必ずしも正當な理解がなかつた。従つて、その故にこそザメンホフの偉大が云爲される場合、屢々不注意な錯誤がなされて來た。その錯誤の重なる對象は、人類人主義、ホマラニスマ所謂内的思想インテルナ・イデーオと呼ばれてゐるものだ。私は今人類人主義を通じて、彼の社會思想を簡単に検討し、最後に彼の科學思想に少しく言及してみようと思ふ。

人類人主義は四海兄弟の平和思想である。それ以上嚴めしい内容をこの言葉に期待するのは、滑稽であらう。だが、われわれから觀れば、この言葉は、表面ごんなに漠然とした概念を持つやうに見えても、當時の最も意識的な社會人の抱いてゐた反軍國主義の思想が、より平和的な穩かな表現を擇んだものさしか思へない。稍々滑稽な表現だが、戰闘的人類人主義は反軍國主義の別名とならう。併し、この中立的な反軍國主義は、トルストイの無抵抗主義ほどの積極性をも具へなかつた。その重なる理由は、悲しいかなザメンホフ自身の偏跛なそして餘りに簡単な社會觀に基因してゐた。彼は、幼時にピヤリストツクの町で、人々が言語の不通から殴ぐり合つてゐるのを、悲しみながら見てゐた時に抱いてゐた社會觀を、成長した後に尙より豊富に又複雑に擴大することを怠つてゐたのである。彼は戦争と云ふ重大な、そして複雑な原因を持つ社會現象の最大原因が言語の相違に依る意志不通に在ると信じてゐたからだ。經濟に對する眼を無理にも押し開かれた現代人は、かういふ思想にたゞ微笑を感じるほかはない。たゞ、注意を惹く事實は、かう云ふ社會觀を背景とする人類人主義を、そのまゝ承けついで、その後のエスペラント運動が、次第に初期の社會運動の形態を襲つて、後には單なる言語運動の外觀を呈するに至つたものである。人類人主義の反軍國熱は、まことにラング・アンテルナショナル(「國際語」)の著者ランテイーが揶揄するやうに、獨軍の打鳴らす砲聲と共に、朝霞のやうに他愛もなく消え失せてしまつたのであつた。けれども、この人類人主義の中には、歴史と共に生き延ぶべき本質的な生命力があつた。それは、人類愛の思想をもつと具體化した國際主義だつた。ザ

メンホフの意識の中に芽ぐんだ國際主義が、どんな構造を持つてゐたかは、審かにはわからない。けれども、恐らく、この純眞な夢想家の暖かい腦裡にも、近代人の社會生活の擴大、即ち個人、家庭、國家など云ふ在來の社會生活の體制を踏み越えて、國際生活と云ふ新な體制が現實的に着々誕生しつつあることが、仄かに意識されてゐたことは疑ひない。だから、彼は、現實に國家と云ふ體制の嚴存を認めて、それを無視する如き態度には決して出でなかつたと同時に、又忌むべきショウヴィニスムを完全に唾棄することが出来たのである。その最もし、例はツイオニスト（シオニスト）運動に對する彼の態度であらう。幾多の天才を産みながら、不當に恥かしめられ、又虐げられたユダヤ民族——ザメンホフ自身もそれに屬してゐたのだが——に對する同情と義憤に於いて、彼は決して人後に墮ちる者ではなかつたであらう。けれども、若し、ツイオニストが、舊約に見るやうな擇ばれた民と云つたやうな特權意識、從つて又ショウヴィニスム的な排他主義を目指すとするれば、凡そこれほどザメンホフの思想と遠いものはない。彼のツイオニスト運動に對する態度が、飽くまで被壓迫者の權利擁護を限界としてゐたことは、賢明で、且つ正當なものであらう。民族運動が正當に理解され指導されない時は、それは常に生物學的な群體の軍事行動への道を辿る。その危険を豫感して盲動しなかつた點は、やはりザメンホフを正當な國際主義者の一人と爲す所以であらう。

次に、彼は科學者だつた。性格的に感情的な夢想家だつた彼は、幸か不幸か、自然科學の一分科を専門とする身だつた。而も、それは、人間のメカニスムを最も多く且つ正確に示す醫學だつた。そこで、この多感な醫學者も、科學的眞理に對してはやはり忠實でない譯には行かなかつた。そして、遂に、彼の如き夢想家も、虚心であれば立派な科學者となることを身を以つて立證した。それは、彼が醫學者として偉大となつたのではなかつたけれども、言語學者として偉大となつたからである。と云へば、言語學的著述を一冊も残さなかつた彼を、世に在る言語學者は嘲笑ふだらう。けれども、彼は正に偉大なる言語學者、從つて科學者だつた。それは、彼の言語に對する科學的見解の故である。彼は言語が神に與へられたものでなく、人間の所産であることを正確に科學的に認識し、その認識をエスペラント語の創造によつて明白に實證したか

らである。國際語の可能な結論するまでの彼の科學者としての論理には、少しの誤謬もなかつた。例へ、エスペラントが言語學的に今後缺點を多く指摘され、又改變を強ひられ、若くは、又新たなる國際語に依つて置き換へられる日が来るとしても、ザメンホフは、宗教的偏見や形而上學的迷妄に依る言語の神格化から言語を正當に解放した意味に於いて、偉大なる科學者の一人として萬人に記憶さるべき名譽を擔つてゐるのである。だからして、彼のかうした科學的頭腦は、又、社會運動としてのエスペラント運動に對して、有效な戰術を産み出すことが出来たのである。綠星、綠旗、讃歌、又運動の組織方法としての會員、團體の設置、大會の開催など、よし彼がそれらを一々案出しなくとも、それを採用した點でも彼が決して單なる夢想家でなかつたことが肯ける。

最後に彼の玄妙な形而上學がたゞ一つ、われわれに少々同情ある困惑をよぎなくさせる。それは、彼の靈魂の思想、又は彼の神秘的な「力」への祈りに見える彼の神秘主義だ。それは、われわれの理解の外に在る。從つて、こゝに批判らしい言句を述べることは、僭越の誹を免れないかも知れない。併し、彼の思想の他の部分から幾分の憶測を加へ、又彼の還境からも適宜な推斷を下すことの可能性が見出される。彼の形而上學は恐らく理性の絶對化であり神格化であらう。彼は、幼時の教養からしても、宗教的な感情を多分に持つてゐた。彼が、後年、科學の世界に頭をつき入れて、幼時、彼の敬虔な母親に依つて與へられた基督教的な唯心思想、絶對主義が、次第に懷疑の暗雲の中に包み込まれてしまつた後も、彼の頭腦の一隅にはその殘滓が根深く膠著してゐたのである。彼はこの形而上的な要求に押されて、常に何物かを絶對化する慾望を感じた。然るに、神を喪失した合理主義者の人間に、若し絶對化の對象が残つてゐるさすれば、われわれ自身の理性より他にない。そこで、眞、善、美であらうと或はその統一的な實在であらうと、かうした夢は、さう云ふ人間に依つて捕へられるのである。我が科學者ザメンホフが、最後に遂に現實を遊離したこの玄妙な天衣からは、われわれは、残念ながら手を引かざるを得ない。けれども、われわれは、われわれのために尙多くのことを果してくれたあの愛すべき老友ザメンホフの、われわれに送る暖かい息吹を背後に感ずることのみを以つて満足しよう。（1930・3・20）

Zamenhof の 思 ひ 出

中 村 正 一

ツァー専制の下に踏みにじられながらも、無法な無理解な cenzuristo への忍従の中からもロシアの esp. 運動は大战前に非常な発展の花を開かせた。Zamenhof の編輯していた最初の esp-istoj の機関紙 “La Esperantisto” の読者の3分の1は實にロシアの同志であつた。Borovko, Devjatnin, Dombrovski, Kofman, Grabowski, Blumenthal (La Belmont) 等の熱心な活動的 esp-istoj はロシアに於ける esp. 運動の最初の基礎を築いた人々である。

その中の一人 V. N. Devjatnin の古き一人の esp-isto としての思い出が1929年 SAT の月刊雑誌 “La Nova Epoko” 12月 Zamenhof 記念號に載せられた(尙記念號の前半は N. V. Nekrasov による Zamenhof の Moskvo 生活に就いての詳細な且つ興味ある研究がで、いる)。彼は Zamenhof に續いて多くの詩を作つた、優れた esp. poeto であり、今尙その詩篇は愛誦されている。その彼 Devjatnin が初めて dro. Esperanto を會見したわれわれにさつても懐しみの深い古い思い出を以下に伝えよう。

Devjatnin が Volapük に呆れはて esp. をやり出したのは Zamenhof が D-ro Esperanto の匿名の下に初めて所謂 esp. を世に問うた Unua Libao 刊行(1887)後4年の1891年であつたとは如何にも古い思い出のいさぐちではある。彼は當時 Vilno の町に住んでいた。一ヶ月で esp. を片付けた後は早速に同じ町の同志と宣傳に研究に活潑な運動を初めた。やがて “Majstro” に手紙を出して esp. に關する又は esp. での全文獻を送るよう頼んだ。Esp. の全文獻と言つたつて眼をむくには及ばない、1890年代の初めには實にポケット一つに自由に出し入れできるほどだつたのである。返事を受取つたのは數日たつてからであつた。この返事が實に彼のその後38年にわたる e-p-ista vivo の最初の楔だつたのである。

“Kara samideano! Mi estis tre ĝoja, ricevinte vian leteron, tiel regule kaj bonstile skribitan esperante post tiel mallonga studado de la lingvo. Mi kore gratulas vin pro via sukceso kaj mi esperas, ke vi por longa tempo restos fidela kaj fervora adepto de nia Esperanta movado. Bonvolu skribi al mi pri la

stato de nia afero en via urbo kaj sendi ian materialon por la redaktata de mi ĵurnalo “La Esperantisto.” Kune kun tiu ĉi letero mi sendas al vi en aparta rekomendita banderolo ĉiujn esper. librojn, kiuj ĝis nun estis presitaj, nome: duan libron, adresaron, plenan vortaron, kaj du lastajn numerojn de “La Esperantisto”. El la sendita de vi mono (2 rubloj) restas ĉe mi 80 kop., mi dume notis en vian konton, sed, se vi deziras, mi laŭ via postulo, resendos ilin al vi, aŭ uzos kiel pagon por aliaj presotaj esp. libroj. Koran saluton! —Via Zamenhof.”

すべての手紙に對してきちょうめんな Zamenhof のこの眞實な丁寧な手紙はどれほど彼を喜ばせたことであろう。

この親切な返答に接し、更に、より大きな熱心さと努力さを以て彼は翻譯創作を寸時も休めず、勉強を數年にわたつて續けた。しかしこの彼の熱心な努力と共に彼を少したりともよき esp-isto としようとするのを惜まなかつた Zamenhof のより大きな努力を見逃してはならない。Devjatnin は言う。

“Nun, rememorante tiun delonge forpasintan tempon, mi admiregas senfinan paciencon, toleremon kaj ekstreman energion, kiujn devis posedi tiu ĉi homo, por gvidi kaj direkti la amason da svarmintaj ĉirkaŭ li novaj adeptoj de Esperanto, el kiuj li volis fari (kaj faris!) ĝustajn esperantistojn. Pri tio ĉi mi povas juĝi laŭ mi mem kaj laŭ vortoj de multaj konataj esperantistoj, kiuj iam interrilatis kun Zamenhof, ofte eĉ trouzante lian neelĉerpeblan bonecon. Neniun leteron, eĉ la plej sensignifan, li estis lasanta sen repondo, al ĉiuj li estis ĉiam preta helpi per sia sperto, per siaj scioj, ŝutante kvazaŭ el korno de abundeco dekstren kaj maldekstren siajn konsilojn, klarigojn, kuraĝigojn!... Jes, malofte aperas homoj, similaj al d-ro Zamenhof!...”

1893年には古い esp-isto Autoni Grabowski の esp. 改良の提案があつた、がその運動は僅かな波紋を esp. 界に描いただけで消えてしまつた。それと前後して、1893年12月の初め Devjatnin は長い間の思いかなつて、當時 Grodno に住んでいた Zamenhof を訪れるこ

さげできた。

停車場から遠くもない彼の家で三度鈴を鳴らした後、灰色が、つた茶のひげをつけ、眼鏡をかけた頭の禿げ上つた小さな男が戸を開けた。

—Ĉu mi povas vidi d-ron Zamenhof?—
demandis mi la malgrandan viron (mi parolis, kompreneble, ruse).

—Estas mi,—respondis li, ankaŭ ruse, preterlasante min en la antaŭĉamb:on kaj fermante la enirpordon:—bonvolu eniri.

Vilno から Grodno に来るまで彼はいろんなあいさつの文句を考えてをいたんだつたけれども、現在、眼の前にしかも突然 Zamenhof を見出したので、何から何まで面喰つてしまつた。考えてをいた文句の断片が頭の中でめちやくちやに混錯した。で、彼はロシア語と esp. と交ぜこぜにした何だか譯のわからない文句をポツポツと言うのみであつた。自分の名前も言はずに。Zamenhof は左手の戸を開けて、手振りて彼を室の中へ招き込んだ。

—Mi petas,—daŭrigis li ruse.

Ni eniris en negrandan, tre modeste meblitan kabineton, kaj la afabla mastro alŝovis al mi unu el la seĝoj apud la skribtablo, invitante min sidiĝi.

—Kun kiu mi havas la plezuron paroli?—
demandis li jam esperante. Mi ankoraŭ pli konfuziĝis.

—Mi estas nova esperantisto... balbutis mi;—mia nomo estas Devjatnin... Ha!—
ekkriis Zamenhof;—mia korespondanto kaj kunlaboranto, tradukinto de “Demono!”
Estas tre agrable konatiĝi kun vi per:one!
[“Demono” は Lermontov の詩集で、Vilno で出版されたもの]。

Kaj lia mirinde agrabla vizaĝo eklumiĝis per bona rideto.

—Mi nur hieraŭ tra legis vian “Demonon,”
—daŭrigis li: kaj mi trovis la tradukon tute bona, kvankam vi ne uzas “la”. Sed en unu loko vi faris zoologian eraron: vi komparis la riveron Terek kun “leonino kun kolharo”. La komparo estas belega, sed la leoninoj ne havas kolharojn....

—Pardonu, kara majstro, rediris mi: tiu ĉi komparo ne estas mia, sed de Lermontev mem. Li ja skribas: “kaj Te ek saltis kiel leonino kun vila kolhararo sur la dorso”...

—Jes?!—miris Zamenhof,—mi tute ne

memoras tiun ĉi strangajon!—Kaj li bonanime ekridis:—Tiaokaze vi estas tute prava: vi volas esti kiel eble plej proksime al la originalo? Tre bone, tre bone!

Pli ol du horojn mi restis ĉe la gastama kaj afabla majstro. Li konatigis min kun sia edzino, pri kiu li poste malkaŝe diris al mi, ke ŝi ne estas favora al Esperanto, ĉar dank’ al ĝi li perdis grandan kvanton da siaj klientoj.

—Ili, verŝajne, timas,—ridetante klarigis Zamenhof,—sin turni al mi, opiniante min eble iom freneza, ĉar mi okupas min per “tia sensencaĵo”....

“La Esp-isto” の編輯者として、無数の手紙を整理し返答する傍、多くの改良論者と断えず戦い、内にあつては患者は減り、Klara 夫人からも esp. を嫌がられた Zamenhof の當時の生活。實に多難な苦しい時ではあつた。しかし、打寄せて来る無数の困難、不快にも拘らず、彼は常に “kuraĝo” と “bona humoro” と “tute juna espero je la pli bona estonta tempo” とを失はなかつた。Esp. の必然性を見究はめて、その確信を固守して、すべての日和見主義者の reformoj をしりぞけて、彼らと勇敢に戦つた Zamenhof を支持したのは實にこの三つの力であつたのだ。
“Dum nia longa interparolo li kelkajn fojojn ripetis siajn amatajn esprimojn. “Ni laboru kaj esperu” kaj “la estonteco estas nia”...

Mi foriris de Zamenhof tute ravita: neniam ankoraŭ mi havis tiel agrablan kaj interesan kunparolanton!

Devjatnin はかくしてその思い出の記録を閉ぢている。

Devjatnin の此懐しい思い出の中に實に人間らしい Zamenhof の姿を見出す。Volapiuk の坊主 Schleyer の如き専制君主、de Beaufront の如き狡智にたけた奸物、その他言語學者の pedanteco の蔭に隠れてる國際語の間屋どもの不純性や官僚性に比して、Zamenhof は何と demokrata な homeca な存在であろう。更に肉のついた彼の姿に接し得られると共にわれわれはこの回想記の中で Klara 夫人の esp. に對する不貞ぶりを見届け得たのは一寸遺憾だつたように思はれた。今までの彼女のあまりの idealigo に對して。

言語の本質とエスペラント

小 泉 潔

われわれが現在のエス運動を充分理解し、その発展を見透し得るには、今まで一應は理解されて居た筈の「エスペラントとは何ぞや」を更に現在の地點に立つて再吟味する必要がある。今迄の運動は今迄の意識で出来た。今一層の運動の展開はより一層の根本的な意識を必要とする。而もそれは今迄に獲得した條件の批判によつて可能である。エスペラントは古代よりの言語的遺産を素材として最近世の社會的條件が加工し仕上げた言語だ。今言語一般と近世的社會條件を吟味する必要がある。言語は談話の手段だ。談話是一種の労働だ。最も單純な形に還元すれば自然を征服する爲に人間の労働を組織する特殊な労働だ。言語は其の特殊なる労働の手段技術である。人間が自然を一層多く征服すればするだけ、又其の爲に人間の労働の組織の複雑化が必然となればなる丈、言語は又複雑化して來た。かくて我々の現在見聞きする言語談話の大部分は直接人類の自然征服労働(生産)と何等の關係なきものゝ如くさへ思はるゝに到つた。言語は思想交換の具であるとか相互理解の具であるとなす在來の定義は此の複雑化した言語機能を部分的に(不徹底に)説明したものである。(何故なら思想とは自然征服の人間の頭腦への反映、即ち自然征服の生産物の一部である、相互理解は話者相互の頭腦に共通の思想即ち一種の生産物を生産することである。)

即ち、言語は、人間と自然と及び人間と人間との間の多様な労働を人間と人間との間の一様な特殊な労働により測定したるものである。人間と自然との關係(人間により征服されたる自然力)は之を技術といふ。自然征服に於ける人間と人間との關係を社會といふ。社會的實踐に於ける言語の實體、言語労働を談話といふ。今その實體的活動を假に抽象し靜的にこれを見る時は「言語」なるものを得ることが出来る。この言語は今これを圖式的に言へば(何故なら現實には多くの交互作用、及び再生産作用があるがそれらを一先づ抽象し去れば)自然に關する限りに於いて言語内容を形成し、社會に關する限りに於いて言語形式を形成する。即ち言語は自然によりて内容を規定され、社會によりて形式を規定されて居る。言語形式は更に言語形態及び

言語様式に分析されねばならぬ。言語形態はその先行言語形態により規定さる。即ち新たな言語内容が古き言語形態(素材)を藉り、新たな言語様式の下で活動するに到る。而してこの言語様式は社會により規定されるものであつて、原始共同體的、權威的階級的及び世界的共同體的の三大段階の轉化をなす。

社會の發展はこれを生産に於ける分勞の見地より見る事が出来る。従つて言語形式の發展も亦分勞の見地より最も明白に解することが出来る。(即ち言語の發生、思惟と行爲の分化そのものが既に労働の分化(specialigo)、分勞の一例に過ぎないことを知る)。原始的人間群内に於ける分勞の發展、労働そのものゝ時間的及び地域的分化例へば獲得、運搬、貯藏等、人間群成員配分の特化、年齢別、性別等此處に言語發生の動機を見る。人類分布の地域別、支配、被支配の階級別の發生をも亦一種の労働力の配分及び労働の分化の問題として理解し得可きことを知るならば言語の發生發展の一切が又此の見地より理解さるべきことを知らねばならぬ。(勿論、言語にして一度び分化し確立したる以上は其自身の相對的獨立性の諸性を發展の上にあらずしてを茲に看過して居るのではないが、只今其等の條件を問題外に置いてゐるのである)。

【註】 言語様式は通常宗教、哲學、神學、法律、藝術等に具體的表現を見る普遍的思考様式である。

かくて言語内容の發展の問題は技術の發展の問題である。(茲に技術とは *tekniko, scienco arto* を含む)。言語形式の發展の問題は社會の發展の問題である。即ち方言、國語、世界語の三段階に分つことが出来る。方言的材料が國語形成に役立てられ、國語的材料が世界語形成に利用されやうとも、決して方言が國語に發達し國語が世界語に發達すると觀る可きではなく其間に全然質的飛躍のあることを見逃してはならぬ。方言は原始社會的民衆の言語であり、地域的制約を持ち通常文化を持たず、其の間の技術的法則が意識的に統一されては居ない。(即ち個有の意味に於ける文法を持たない、又個有の意味に於ける文化を持たない) 方言は純粹な意味に於いては原始社會の言語形式であるが、階級國家社會(貴族、

封建、資本家、國家等)の下では被支配階級の言語として種々な制約を受けながら存在してゐる。國語は個有の意味に於いては階級國家社會の支配階級の言語形式にすぎない。國語形態は階級社會に於ける支配階級の言語様式であると言へば一見奇異の感があるであらうが事實、被支配階級は支配階級の言語様式の採用を餘儀なくされてゐるのであり其自身の様式は通常持たないか或は方言様式の内に痕跡を持つ。このことは法律及び宗教が普遍的形態を持ち乍ら結局支配階級の支配様式に過ぎない事を知るならば理解の一助となるであらう。通常地域的制限を持ち文字、文法、文化を持ち、其處には統一的權威的思考様式(偶像崇拜、觀念論)が支配する。茲に注意すべきは階級國家の支配階級語といふは斷じて近世資本主義國家の言語に限つたのではない。それは社會の極めて複雑な階級國家段階及び其の複合を意味する。故に完全な國家を現時持たなくとも、嘗つて持つたもの、或は將た持たんとする要素の成熟せるもの等に於いては國語形式を識別することが不可能ではない。或場合は國語形式より方言形式への崩壊をも見る事が出来る。又此事は一國語形式は必ずしも一國家形態と呼應するとは限らない。即一般的に國家形態段階にある社會は國語形式段階の言語形式をもつといふ意味である。併乍ら近世及び近世國家の發達は生産の技術上及び支配の形式上、文字及び文化の一部を被支配階級に浸透せしめなければならなかつた。國語形式は發展せる生産技術、生産力を基礎とする生活内容及び機能に驅り立てられる、國語形式本來の機能の外へ、本來の使用人以外の手中へ。かくて國語形式は批判の前に立つた。理論的批判の開始は博言學、言語學の發生に表現され實踐的批判は言語教育(國語及び外國語教育)に其の表現を見る。茲に於いて、國語形式を持ち込まれたる被支配階級は國語形式を異なる意義に於いて受け取る。即ち地域的制限、權威的思考様式、既成の文化等を內在的必然的なものとしてではなく外的偶然的なものとして受け取る。茲に、國語形式の批判的攝取の間に世界語形式の條件の一半がある。此れと同時に社會其物の變革、社會認識の變革を伴つて、遂に世界語形式は完成する。世界語形式は地域的制限を捨て去り、權威的思考様式を撤廢し、人間の實踐の認識を以つて此に置き替へる。(従つて文法は當爲的法則に非ずして人間の實踐の手

段として見られる)。而して國語形式中の文化を批判的に攝取し、世界的無階級社會の發達に従ひ又獨自の世界的文化内容を受取る。併し作ら社會は變革期に於いては自己の中に發展せる世界的生産技術、生産力社會認識も現實の國家形態との闘争の條件に制約されて、國語形式に其の表現を托す。だが現實の國家形態が變革され終り、無階級社會が現實化し始めるや、世界語形式を採用し得るに到り、世界語形式は茲に現實化の歩度を早め急速に世界語内容を以つて充たされ世界語活動を開始し得るに到る。

現在のエスペラントは此の形成されつゝある世界語形式である。從來のエスペラント主義は言語形式の批判(現在國語間の矛盾の意識)にのみ立脚し、未だ言語形式の規定者たる社會の批判的認識に到達しなかつた。其故にエスペラントが如何なる社會要素により採用され、何時の日完全に實用され如何なる文化内容を受入れ如何なる文化を創造するに到るかは之を見定めることが不可能であつた。だがザメンホフは既に「エスペラントは社會問題である」と言明し此の事業の後半の完成を後輩に遺した。從來のエスペラント主義は此方面の事業を漠然たる希望なる語を以つて表はした。だが之は今や科學的正確さを以つて規定することが出来る。今やエスペラント主義は世界語に關する單なるウトピーアな空想樂天的感情ではなく必然的な認識體系、即ち科學である。

かくてエスペラント及びエスペラント科學の完成により世界語形式は完成する。

世界語内容の問題は世界的生産技術の問題である(生産技術とは此の場合直接的物質的生産技術各種労働技術工藝及び應用科學のみならず間接的觀念的體系——純粹科學、藝術哲學等をも含む)。世界語形式と世界語内容との綜合の問題は實踐の問題である。實踐とは意識的にして有效なる行爲である。即ち行動の主體及び客體の十分なる認識を不可缺の條件とする。エスペランチストが一般的にエスペラントの本質、エスペランチストの歴史的社會的地位と特殊的に自己の持場に於ける技術の本質及び姿態を十分認識する時始めて其れは可能である。

SAT 運動の意義とその現勢

和田 一郎

去年の日本エスペランティスト第十七回大會に参加された人は地方代表の salutoj や殊に分科會で活潑に活動した SAT-anoj の存在を大抵記憶しているであろう。そして或人は其無作法な存在に憤激したであろうし、又 esp. 運動の satano だと蔑視されたであろうし、神聖な緑星運動を汚す bolŝeviko の輩と痛嘆されたであろうが、われわれはそのように昂奮する前に、げんとして動かすことのできない SAT なるものゝ存在を充分に研究しなければならない。何しろ國際 esp. 運動は SAT と UEA とでビタリと二分されているんだから感傷的に汚物視したり、畏怖したりして反動化しないで、進んでその存在意義を究明し検討して、正しい SAT に對する理解を把えて、批判し、その結果を自己の esp.-isto としての行動に移さなければならない。

194年8月に花の都パリで第10回萬國 esp. 大會が開かれようとした。Bulonjo で第一聲を雄々しくも上げた國際 esp. 運動が順風に帆を迫る勢で進展し、その將來の輝かしい展開の一轉機とも思はれたパリ大會がパリ第一の劇場で素晴らしい前景氣と共に開催されようとした。その時、世界大戰が勃發しパリ目指して、急いでいた人々は慌て、自國に歸り、鐵砲擔いで戦線に立たねばならなかつた。Zamenhof 自身ドイツからデンマーク、スエデンに逃げフィンランドを経て Varsovio え歸らねばならなかつたとは homaranismo にまつて何とゆう大きな皮肉であつたらう。昨日は homara familio の一員として手を握り合うべきだつたのに、今日は互に相手の胸に銃劔を擬して殺戮し合うさわ！そして 1917 年大戰が狂暴の限りを盡した4月14日、ドイツに占領された Varsovio で飛行機の落す爆彈の煙の中に、“Post la grana la milito, alvoko al la diplomatoj.” の一篇に描き出された homaranisto の理想を空しく抱いて Zamenhof は死んだのだつた。

この事實を何を語るか？即ち大戰によつて與えられた人類主義の破綻である。昇天の勢で延びて來た平和主義をつまづいて、全世界 esp-istoj えの指導力を失つてしまつた。その根底をなすものゝ即ち大戰によつてより徹底的に大衆に暴露された支配階級えの不信である。Homaranismo に立籠つていた人々の

資本主義否定である。そして多くの esp-istoj は戦争によつて矛盾に當面せしめられ、その破綻を來した人類主義を捨て、しまつたのである。

かくして esp. の目的を遂行するには徒らに觀念主義の下に、その理想の實現を、人類を搾取する burgaro に期待すべきではなく、搾取されてる生産者階級 proletaro の力によつてこそ、國境を除去し、搾取を廢し、階級の別を棄てた社會が實現され得るこの確信が多くの人々を把えた。そしてそれら具體的運動となつて 1921 年 Prago に創立され “Sennacieca Asocio Tutmonda” (SAT) なる proletaj esp-istoj の國際的な團體として現われた。これによつて戦前から “Liberiga stelo,” “Internacia Socia Revuo,” 等に據つて存在していた階級的 esp-istoj が國際的に完全に結合團結され無産 esp. 運動はこゝに國際的に統一された戦線に立ち得たのである。これ以來國際的 esp. 運動は完全に對立する二つの團體、UEA と SAT とによつて構成された。

しからばその SAT の目的、綱領はさ言へば、先づ SAT 規約第一項を擧げるに如くわれない。即ち SAT は國際語 esp. を全世界無産大衆の階級的利益の爲めに實踐的に利用し、會員をして所謂國際主義者の最も完全なるものたらしめるにある。しかして SAT は何ら政治的な團體でなく、單に教化的教育的な文化機關であり、無産階級全般の利益を esp. を通じて高めんとするに外ならないことに注意しなければならない。

以上の規約に見られるように、SAT の本質は esp. によつて proletaro の利益を進め、その結合をより強固にするにあつて、何ら Moskvo から賄いされてる譯でなく、各國それぞれの無産 esp. 團體からも獨立した國際的團體なのである。世界的に強固に團結することによつてのみ勝利を得られる proletaro の solidareco を esp. によつてより深くより緊密にすることに SAT の使命があるのだ。搾取を捨て階級を除く proletaro の勝利によつてのみ esp. の目的も亦完全に果されるからである。

SAT は獨立した單獨の會員から構成され何ら國民的團體の指導權を握つていない國際

的な團體なのでわない。全地球表面をグリニチを中心とする子午線によつて 24 區に別ち各區から konsilanto を選出して、それによつて SAT の中心機關が組立てられる。議決機關は年一回開かれる大會で、今年は Oksfordo に開かれる萬國大會に對抗して、Londono に催される。現在 SAT 會員數は 6,000 を超え UEA のそれに匹敵しつつある。

機關誌として週刊の “Sennaciulo” があり、月刊 “La Nova Epoko” がある。前者は菊倍判 72 頁で、社會經濟その他、proleto の社會的生活の關心事を中心として編輯されている。後者は文藝科學の雜誌で主としてロシアで編輯される、(最近その教育部が發展して、“Sennacieca Pedagogia Revuo” として獨立し月刊となり、フランスで編輯刊行されることになった)。E. Drezen の國際語史は未だ “La Nova Epoko” に連載されている。新鮮な尖鋭な ideologio に立つて潑刺なる活氣を持つた SAT 文壇の機關誌と言えよう。“Sennaciulo” は實に SAT 運動の動脈をなすもので、主筆 E. Lanti の活潑な才筆は、老巧な全運動の指導振りとともに “S-ulo”, に重きをなしている。陳腐な冗談の反芻許りやつてるその他の國際雜誌と違つて、直接日常の生活に即した生き活きた世界の與える新鮮な緊張さが本誌の特徴なのである。

その他 SAT で数十の出版圖書がある、尙 SAT でわすべて esp. による出版物は Odessa にある Literatura Komisiono の査閲を経なければ出版されず、各國の團體が勝手に全 esp. 文の出版物をなすことを戒めてある。即ち全無産 esp. 界の esp. 出版の統制を行つてゐるのである。例えば近く出る Jack London の “Fera Kalkanumo” は Novjorko の SAT-anoj によつて譯出され、且つ數百ドルの資金を募つてこれを SAT に托した如きよきその一例である。かく意識的な統制によつて SAT の圖書の刊行される事實は注目さるべきだ。更に SAT の出版物で特記すべきは、“Plena Vortaro” の刊行である。言語委員會の Grosjean-Maupin 等の努力によつて、SAT ideologio の統制下に着々進捗中のこの esp.-esp. 辭典 (KABE のその三倍の内容) は SAT 運動を測るによい指針であろう。

SAT と國民的團體 (Laborista Esp.-Asocio) との關係は一昨年の大會で規定され、従前よりより緊密な連絡の下に相互の二運動が進展しつつある。即ち SAT は國際的 per-esp. 運動であり、各國無産 esp. 團體 LEA は言語區域別による por-esp. 運動なのである。

現在各國に於ける LEA の活動を見るにかなりの速度を以て發展しつつある。ドイツにあつては、會員 3,500 を有し機關誌 “Arbeiter-Epist” 4,000 を刊行し、國內の中立的運動と完全に徹底的に對立し、優位をさえ占めている。ロシアの SEU は 4,100 の正會員、1,000 の會友、各地 esp. rondo の會員 16,000 に及んでいる。前號に述べたように、ロシアの運動は今後すばらしいテンポで躍進して行く充分な可能性を持つてゐる。イギリスの LEA は今年 1 月から機關誌 “Brita Laboristo” を刊行し出し、その他フランス、オースタリー、ハンガリー、ノルウェー、オランダ、スウェーデン、フィンランド、ラトビア、ポーランド及びチェコスロヴァキアにそれぞれの LEA が活動している。

上述のように、今や esp. 運動は國際的な分野に於て激しい對立を見出すばかりでなく、各國それぞれの esp. 戦線に於て次第に對立が尖鋭化しつつある。即ち資本と労働との闘争の反映が esp. 界にも見られる。實に全世界數億の無産階級こそ、多くの時間と金とを語學に費すことが出來ず、しかし最も激しく、その相互の團結の緊密化を要望している。インテリゲンチアの如き閑暇消費的な興味や、poligloto 的關心からでなく、その日その日の實踐に於て、無産大衆は實に切實に自己の團結の楔、esperanto を求めてやまないのだ。階級的國際統一戦線強化の武器として、sennacia なその協働に於ける interligilo として、esp. は必然彼らに要求されるのだ。

世界無産大衆の團結の一の楔となり、sennacieco を彼らに培うことに SAT 運動の使命があるのだ。が故に、全世界の無産階級の發展を前提とする SAT 運動の意義は日を追うて益々その重大性を加えて行く。階級的實踐と緊密に結付けられた esp.こそ實に esp. に最後の勝利を約束するものなのだ。

Je la Nomo de l' Vivo から

... La laborantaj amasoj senpere ekparolis kun la eksterlandaj Kamaradoj trans altaj muroj de naciaj lingvoj pere de facila, komprenebla por ili sennacieca lingvo—Esperanto kiu estis genia kreaĵo de modesta, honesta laborulo—plugisto sur la kampo de Tutmonda Civitaneco kaj Tutmonda Solidareco—D-ro L. Zamenhof.

E. Izgur.

如何なる國際語が理想的か

岡本好次

人造國際語史を瞥見すると第十七世紀頃から今日迄に既に五百有餘種の考案が發表されてゐる事を知る。此の多數の國際語の比較研究は到底一朝一夕になし得ない事だが、これら全體を通覽して確乎たる批判の眼を養つてをく事は *esperantistoj* にまつて無意義でないと思ふので、編輯者から乞はれたまゝに本稿を草した。

國際語の分類

これら多數の國際語を大別して次の三種とする。

1. *aprioria sistemo*
2. *aposterioria sistemo*
3. *miksita sistemo*

第一の *sistemo* はその名の示す如く自然語とは全く没交渉に考案者自身の勝手に造りあげたもので、中には言語と云ふよりも符牒や記號にすぎないものもあるが、これらは言語として殆んど取扱ふ價值のないものであるからこゝにのべない事とするが、言語の形をそなへたものでもこの種類に屬するものは種々雑多であるが、これを又二つに分けてみると一つは普通哲學語とよばれてゐるもので、すべて人類のもつあらゆる觀念を論理的に分類して之を秩序整然と配列し様と工夫したもので、これは圖書館の書籍の分類法の様なもので、觀念を初め大きく分類して同じ部門のものには同じ文字とか音節とかを用ひ、それを又細く分類して似よつたものを一まとめにして別の又文字とか音節をきめる。かくの如くにして一つの概念を表はす單語が決定されるのである。第二のものはかゝる組織だつた觀念の分類から出發したのでなく、全く出鱈目に考案者自身で各語彙を作つたものである。出鱈目と云つても大抵は何らかの據り所があるので、例へば或る國語辭典を基準としてその辭典中のすべての語彙に始めから終まで番號をつけてその番號の數字にその語の意味をもたせ、別に各の數字には一定の音をきめて言葉として發音も出来る様にしたのなごその一例である。その他いろんな方法で語彙をきめるのである。哲學語に對してこれらの言語をこゝでは假りに非哲學語とでもよぶことにする。

擬哲學語の例としてこゝに米人 Edward P. Forster が 1908 年に發表した Ro と云ふ語がある。これは觀念分類によつて作つた語で即ち各文字に特別の意味をもたせたもので、例へば a は動詞、b は *ekzisto, substanco*, c は *kvanto, grado*, d は *spaco, loko*, e は形容詞を示す等云つた具合である。その語彙の一例を示せば *bodac*=天, *bodam*=月, *bodar*=星, *bodas*=太陽, *bodak*=彗星, *bodac*=星雲, *bodal*=遊星……等である。

非哲學語の一例としては *Fundamenta Krestomatio* にでゝある Paie の *Pazigrafio* がある。そんなものかは同書で讀んでもらひたい。

第二種の *aposterioria sistemo* のものは第一種のものとは全く正反對に現代の自然語を基調として、なるべく萬國共通の語彙を集めて整理し、簡単な文法をそへたもので *E peranto* を初め *Ido*, *Occidenial*, *Novial* 等その例であつて、近年發表された考案の大部分を占めるものはこの種のものである。

第三種の *miksita sistemo* とは第一第二の兩種のやり方を混合したもので、その代表的のものは *Volapük* である。*Volapük* の語彙は主として英語を基本として採用したものである（この點が *aposterioria sistemo* と同じ行き方）がその語形を原形のまゝ採用せず全くと勝手氣儘に斧鉞を加へたもので、その結果全く原形を想像する事ができない程になつてしまつてゐる語彙が多い。例へば *academy* が *kadem* となり *fire* が *fil* (r をきらつて l のみを用ひたので) となり *rose* が *lol* となるなど實に甚しい變更ぶりで英國人さへ殆んど想像もつかない。これでは *aprioria sistemo* 以上の *arbitreco* 振りを發揮してゐると思へる。それで *miksita sistemo* とよんで前二者と區別するのである。

以上で人造國際語には如何なる種類のものがあるかが判つた事と思ふが、次にこれらの種類のいづれが最も國際語として適當であるかを考察してみる事にしよう。

その順序として先づ國際語は如何なる要素を具備せねばならぬかを見よう。

國際語の三要素

國際語は大體次の如き要求を具備せねばならない。

1. 學習の平易なこと。
2. 絶對中立的なこと。
3. 繊細な描寫も可能な事。

第一に國際語は何國人にさつても學習し易くなければ如何に理想的のものでも實地に活用され難いからこの點が最も重大である。この點が自然語はその國人にさつては平易であるかもしれぬが、他國人にさつてはきはめて學習が困難であつて、この點だけでも國際語たる資格を具備せない。

第二に國際語はなるべく絶對中立でなければならぬ。一國人一民族の所有に屬しその民族にのみ大きな便宜を與へる様な不公平な自然語はこの點でも國際語たる資格がない。

第三に學習の平易と云ふ事を重視した結果 *delikata* な思想をも十分にのべる事のできない様なものとなつては、符牒としての役にはたつかはしらないが言語としての役にはたぬ事になる。

如何なる國際語が理想的か

國際語の

具備すべき要素が以上の三つであるならば上述の三種類の中どれが一番理想的であるかを考へてみる事にしよう。

先づ第一に學習の平易と云ふ點で考へてみる。凡そ言語は文字文法語彙の三要素から成立するが、人造語は文字は大體ラテン文字文法は比較的簡単にできてゐるのが普通であるから、學習の難易は主として數千數萬の語彙が記憶に便にできてゐるか否かによるのである。所で *aprioria sistemo* の中の非哲學語は語彙がたゞ勝手氣儘に決定されたものだから記憶に仲々不便である。之に反して哲學語の方はその語彙が觀念分類によつてやゝ秩序整然と定められてゐるから大變記憶に便利の様であるが、實際上からみると似よつた觀念は似よつた語形で表はされてゐるので、却つて彼此混同するおそれが多くて記憶に不便である。例へば上述の Ro 語でも星と云ふ語を考へる時天文に屬する故 *boda* までは即座に判るが最後の文字が何であるかは見當が付き難

い。勿論類似の語形でも二つ三つ位ならさう記憶に骨も折れないが、廿も卅もあるのでは大變である。次に *miksita sistemo* の語彙はさいふに、これも大部分 *aposteriorie* に採用されてゐるが、實際の形は *aprioria* と何等差異がないもの故同じ様に記憶が困難である。そこへゆくと第二の *aposterioria sistemo* は印歐語族の中からできるだけ各國共通の語根を採用してゐるからこれらの言語の一つを母國語とするもの又は之に通じてゐるものにさつては記憶が實に容易である。故にこの學習平易の點では *aposterioria* のものが斷然群を抜いてゐる。

次に絶對中立と云ふ點では *aprioria* のものが最もすぐれてゐる。*aposterioria* のものは印歐語に通ぜないものにさつては多少の *handikapo* がある。この點多少不公平であるが併し現在の人類の文明がこれらの語族の言語を語る民衆に屬してゐる事と世界の他の文明國例へば日本語の如きでも専門學術上の語彙には澤山の語を印歐語から借用してゐるのであり、殊に日本などでは日常語にも澤山のこいつた語形が外來語として入つてゐる事からみてやむをえない。この絶對中立の點で *aposterioria lingvo* は *aprioria* のものに一籌を輸するが、併しその中でも *Esperanto* の如く出来るだけ僅少の基本語根を採用してそれより *deriv* した合成語を澤山使用するのはこの不公平を大いに緩和するもので、その點が吾人が *apos. lingvo* の中で *Esp.* を最上なりとする理由の一である。第三の繊細な思想感情を表す點では *sistemo* の差異による優劣は餘りない様である。

それで私は上記の理由から國際語は第三種の *aposterioria sistemo* に屬する語でなければならぬと斷定するものである。而してその第三種の中で *Esperanto* が最もよいといふ理由については別稿 *Occidental* の批判の時に述べる事にする。頁數の制限のため十分意のある處を述べ盡せなかつたことをお免し下さい。

自 慢 く ら べ

——「エスペラント」文庫——

川 崎 直 一

(A) 日本で一番立派な biblioteko わなん
さいつても財団法人日本エスペラント學會事
務所の二階に存在するものである。立派さ
ゆうのわ、〔第一〕書籍の数の多いこと。〔第
二〕あらゆる種類にわたっていること。個人
の所有の文庫はその書籍の種類にむらがあ
る。すなわち社會學の好きな人わこれに關係
あるものばかり集めるし、字引の好きな人わ
字引ばかり集める。

(B) 個人で書籍をもつことも多く持つてい
る人わおそらく九州の伊藤徳之助氏であらう。
ある人から聞いた話によると、かつて東宮豊
達氏が：「おれがおそらく日本で一番たくさ
ん本を持つているだらう。」としばつておら
れたが、よく調べてみると伊藤氏のほうが多
かつたそうである。もつとも私わ(=川崎)ま
だ伊藤氏の文庫を拜見していない。しかし目
下校正中の私の「エスペラント研究用書解題」
を編むために、伊藤氏から本を拜借したが、
私の借りたい本をほとんど全部氏が持つてお
られたことから察すると、おそらく伊藤氏が
日本一の書籍持ちであるさゆう うわさわ た
しかであらう。(もし伊藤氏よりたくさん本を
持つていると主張する人があつたら、どうか
protesto をだしてください。調査の上いつで
もこの項をとりけします)。

(C) 社會運動に關する書物をもつとも多く
集めておられるのわ おそらく大阪の福田國
太郎氏であらう。氏わ 1906 年以來の同志で
それ以來ずっと今まで集めておられつすけて
いるから、氏の文庫はたいしたものだ。最近
わ Unua Libro (1887 年 Zamenhof がこれで
Esperanto を世界に發表した) の rusa eldono

さ、franca eldono を手に入れて、大に威張つ
ている。古雑誌(これは今なかなか集めよう
と思つても そうてい 手に入らない貴重なも
ので、しかも 調べごとをするときにわ ぜひ
必要なものであるが) もうんさ押入に(かご
うか知らない、とにかく氏の家のどこかに)
ごじやごじやに つつこんで あるらしい。整
理しなければ せつかくの寶が もちぐさりで
ある。

(C) 古い同志ならたいていごなたでも古い
出版物を藏しておられることであらう。ぜひ
さゆうの書籍の目録(所有者と所在地つき)
をつくりたいものである。東京の丘淺次郎氏
静岡の高橋邦太郎氏、奈良の松田恒次郎氏な
ごまず第一にこの nigra listo にあげられるべ
き人であらう。

(D) 最後にあたつて、ぜひ注意していただ
きたい文庫のあることを紹介する。その文庫
わ(學會のそれのように数が多いこともない
し、種類がいろいろあるわけでもない、福田
氏のように珍籍を集めて得意になつてい
るでもない。しかし Esperanto の語學的研究す
なわち Esperantologio のために、組織的に嚴
重に書物を撰擇して(すなわちその一々の書
物の撰擇の理由をさゆうのこのことのできる) 文庫
(文法、辭書、運動史、書籍目録、文學などす
べてにわたつて もちろん 完全無缺でわない
が)がある。すなわちこの文庫を買いさえす
れば Esperantologio 研究にわもつてこいであ
る。前置きがだいぶ長くなつたが、その文庫
の所有者さわ他の人でわない、この文章の筆
者すなわち私(=川崎)である。ただし絶対に
賣らない。

新 刊 紹 介

大 島 義 夫

★EN OKACIDENTO NENIO NOVA, de E. M. Remarque, tradukita de kvar p. el germana lingvo, 15×21 cm, p. 252, eld. de Heroldo de Esperanto, Köln, Germ. 1929.

Esp-istoj お待兼ねの「西部戦線異状なし」。譯は“Heroldo de Esp.”の大將 T. Jung. を初め全部四人の共譯。

この本を譯し出した國語の数は二十に餘り、今までに200萬部が全世界にバラまかれたさわ、この本の輸入禁止を敢行した Mussolini 閣下も驚嘆されたに違ひあるまい。日本でも數ヶ月で數十萬を賣り、「西部戦線異状なし」の句わすつかり流行語になつてしまつた。ましてわれら esp-ujo に住むもの esp. 譯を持つて、esp. 戦線にも異状あることを天下に誇示しなければ、未來の社會のトップを切るべき esp. の義理が立たないわけ。“Heroldo”で譯したのも又宜べなるかなだ。

内容わ知つての通り 19 の若年で戦線に狩り出され、その青春期を破壊された青年の大戦参加記録。隠すところなく大膽に、平明に曝露された戦争の内面は šovinismo に逆上した人々えのよい注射劑だ。戦争そのものの存在の批判は保留されてわいるけれども、これを讀むことによつて、反戦主義を pantomimo を通して培はれるささわ確かだ。未成年者の純な生活意識を持つた作者の偽らない戦争生活の曝露は、屈折された ideologio に視力を奪はれた「肉弾」の著者のそれさわ違つて、われわれにより切實に深刻に訴え、更に一步進んで、戦争そのものに對する徹底的批判を促すものだ。

Esp. の本としてはとてもシャんな表装、判も大きいし、字も大きくて讀み易い。譯文は原作の平明な流暢さを傳えていさゝかも遺憾なし。卷末にわ詳しい特殊用語の表がある。全 esp-istoj に期待されていただけ申込殺到で、學會の洋書部の戦線も異状を呈しそうださ。(上製クロス装 3 圓 50 錢(送 10 錢)並製 2 圓 50 錢(送 6 錢)。

★BELGA ANTOLOGIO, du vol. Flandra k. Franca partoj, 13×24 cm. Flandra parto kompilita de H. Vermuyten, p. 285. Franca parto komp. de M. Janmotte, p. 283 eld. Belga Esp.-Instiluto. 11, Kl. Hondstr, Antverpeno, Belg. 1928.

1928年ベルギー、アントワープで開かれた第20回萬國 esp. 大會に際して出版された彪大な本。二部から成り、flandra 語及びフランス語で書かれたベルギー文學の粹を蒐めたもの。各部數十の作家による百に近いその傑作からの拔萃をのせたベルギー文學の大鳥瞰圖である。更に各部にわ數十ページのそれぞれの語で書かれた文學についての史的概觀を付してあるから、フランス、フランドラ兩國語に跨るベルギー文學を研究する人によい書である。價格は兩部で 8 sv. fr.

例えば、フランス語部の M. Maeterlinck の項を見れば詳細な評傳と詩 “Korfoliaro,” “La Svarmo,” “La Silento,” “Monna Vanna,” “La Blua Birdo,” “La Avertitoj,” の拔萃が 30 p. に汎つて載せてある。Esp. による小國文學紹介の近來の大作だ。

★ENCIKLOPEDIA VORTARO, esp-germana, kvara parto, de Eugen Wüster, 17×26 cm. p. 415-579 eld. Ferdinand Hirt & Sohn, Leipzig, Germ. 1930.

E. Wüster の大辭典の第4部。辭引屋だなんて悪く言われるけれど、著者の energia な laborema なのにわ感服に堪えない。この部わ I から K の korno まで、これで全卷の半分を超えたことになる。詳細、緻密にあらゆる esp. の語を徹底的に蒐集網羅し、Zamenhof の文例を挙げ、出所を示し辭書として到らぬ所なく整つてゐる。しかし残念なささわ esp-germana なので日本の esp-istoj 全般にわ向かないさささ、定價の不廉なささ(1部 7.50 圓、全7部だ。

★GAJAJ HOROJ POR ESP-ISTOJ, de C. Walter, 11×14 cm. p. 56. Ricevebla per 2 respond kuponoj ĉe la verkinto: C. Walter, Berlin W. 10 Hohenzollenstr, 11, Germ.

本書含むさころのもの、spritajo 80, bonhumora anekdoto が 20, なぞなぞが 20 題、gaja preseraro, e.p. vortludo なるものそれぞれ 20 づゝ。いかにもよく集められた笑の種でわある。確かにこれなら笑つて esp. が覺えられよう。Preseraro の例を一つ。“Sur tiu ĉi banko mi sidis iam kun ŝi. Ŝi estis varma kaj, pri kio mi precipe ĝojis, ŝi donis al mi kaŝe kason.” なんて愉快な preseja diablo のいたづらじやありませんか!

エスペラント初等講座

La Pasiŝtino

Malgranda¹⁾ Mario paŝtas²⁾ ŝafojn. Ŝi estas tre malriĉa, ĉar ŝiaj gepatroj estas mortintaj. Ŝi estas orfino. Ŝiaj vestoj estas ĉifonaj,³⁾ ŝiaj truhavaj⁴⁾ ŝtrumpoj estas en⁵⁾ betulŝelaj ŝuoj. En sia betulŝela tornistro ŝi portas ŝiman panon kaj malfreŝan buteron. La riĉa mastro ne tute bone⁶⁾ agas kontraŭ la malfeliĉa knabineto. En la ĉambro ŝi ĉiam sentas sin sola,⁷⁾ ĉirkaŭata⁸⁾ de fremdaj⁹⁾ n amikaj homoj. Sed kiam ŝi paŝtas ŝafojn en la bela naturo, ŝi sentas sin pli feliĉa. La ŝafoj ŝin sekvas obeeme. Eĉ la atakema virŝafo¹⁰⁾ ŝin neniam malobeas. Ĉiun ŝtonon kaj ĉiun arbon ŝi konas en la paŝtejo. Ĉiu birdeto kaj ĉiu leporo estas ŝia amiko; kaj ŝi estas kiel¹¹⁾ la ĉefa feino de ensorĉita mondo.¹²⁾ Ĉio ŝajnas ensorĉita. La ŝima panaĉo¹³⁾ havas la guston de freŝa pasteĉo, la akvo ĉerpita el klara fonto estas kiel plej¹⁴⁾ bona lakto, por ne paroli¹⁵⁾ pri la delikataj¹⁶⁾ fragoj¹⁷⁾, mirteloj¹⁸⁾ kaj framboj,¹⁹⁾ kiujn la norda²⁰⁾ naturo donacas al ŝi. Lukse ŝi estas vestita per la plej belaj filikoj kaj floroj de sia regno,²¹⁾ kiam ŝi dancas kun la

牧 女

小さな (malgranda) マリーオは羊を (ŝafojn) 飼つてゐます (paŝtas)。彼女の両親 (ŝiaj gepatroj) は死んでしまつた (estas mortintaj) ので (ĉar)、彼女は人變 (tre) 貧乏 (mal'riĉa) です。彼女は孤兒 (orf'ino) です。彼女の着物 (vestoj) は襤褸 (ĉifonoj) で、彼女の穴のあいた (truhavaj) 靴下は (ŝtrumpoj) 樺の木 of 皮 of (betul'selaj) 靴 (ŝuoj) を穿いてゐます。 (estas en) 彼女は樺の木 of 皮 of 背嚢 (betulŝela tornistro) の中に、黴びた (ŝima'n) パンと古い (mal'freŝan) バタ (buteron) を持つてゐます (portas 運んでゐる)。裕福な (riĉa) 主人 (mastro) は此不幸な (malfeliĉa) 小娘 (knab'in'eto) を、あまりよくは取扱つて (agas) 呉れません。部屋の中では (en la ĉambro)、彼女は親しくない (ne'amikaj) 見知らぬ (fremdaj) 人々に取圍まれて、いつも (ĉiam) 淋しい思ひをしてゐます (sentas sin sola)。乍併 (sed) 彼女が美しい自然の中で (en la bela naturo) 羊を飼ふ (paŝtas ŝafojn) 時には (kiam)、もつと幸福に (pli feliĉa) 感じます (sentas sin)。羊は柔順に (obe'em'e) 彼女に従ひます。喧嘩好きな (atak'ema) 牡羊 (vir'ŝafo) でさへ (eĉ) 決して彼女に逆らふ (mal'obeas) 様なことをしません。彼女は牧場 (paŝtejo) の石 (ŝtono) や木 (arbo) をどれもこれも (ĉiu) 知つてゐます (konas)。小鳥 (bird'eto) や兎 (lepore) は皆 (ĉiu) 彼女の友達 (amiko) です。そして彼女はまるで (kiel) 魔法の國 (en'sorĉita mondo) の重立つた (ĉefa) 仙女 (feino) の様です。何もかもが (ĉio) 魔法にかけられてゐる (ensorĉita) 様に思はれます (ŝajnas)。北國 of 自然 (norda naturo) が彼女に贈つて呉れる (donacas) 甘い (delikataj) 草莓 (frago) やこけもゝ (mirtelo) やきいちご等は言ふに及ばず (por ne paroli)、黴びた (ŝima) パン (pan'aĉo) も出来立て of (freŝa) 肉パイ (pasteĉo) の様な味 (gusto) がし、澄みきつた (klara) 泉 (fonto) から汲み上げた (ĉerpita) 水は最上等 of (plej bona) 牛乳 (lakto) の様です。彼女が優雅な (gracia) 仙女達と舞ひ踊る (dancas) 時に、彼女はお國 of 一番美しい羊齒 (filiko) や花を以つて、きらびやかに (lukse) 身を飾る (estas vestita)

graciaj²²⁾ feinoj. Ĉio estas riĉa, ĉio plaĉas al ŝi en la ĉarma naturo.

【註釋】 1) *mal'granda* は本来「形状の小さいこと」を云ふのであるが、同時に「年齢の小さいこと」をも含めてゐると解釋した方がよい場合もある。これは其時と場合によつて適宜に判斷せねばならぬ。こゝで、後者の解釋が當つてゐると思ふ。即ち「可愛い小さなマリーナ」と云ふ氣持。接尾字 *et* は *mal-granda* と同じく「小さいこと」を示すが、愛稱として用ひられることが多い。(例: *patrinteo* お母さん)。2) *paŝti* ~ *liveri* *nutraĵon al brutoj* (Kabe) 牧す、家畜の類を牧場等で飼ふ。従つて *paŝti* の主語は「飼主」であり *bovoj*, *ĉevaloj*, *ŝafoj* 等の *brutoj* を主語となす場合には *paŝtigi*, *sin paŝti* を用ひねばならぬ。3) *ĉifona* 襤褸の。こゝでは *ĉifon'ig'ita* の省略形と見た方がよからう。4) *tru'hava* *trv(on)hav(ant)a* の意味、穴の開いた。5) *en betulselaĵoj* ŝuoj 樺の木の皮で出来た靴を穿いて。類例: *virino en funebra vesto* 喪服を身につけた婦人。6) *ne tute bone* 全然よくは…しない。大してよくもない。〔注意〕 *ne* はその直後に來る言葉の否定であるから、*tute ne bone* とすれば、「全然よくなく」の意味になる。猶初等者が往々混同する點は *ne* と *mal-* である。*ne* は單なる否定。例: *ne-bela* 美しくない、(而し「醜い」と云ふ處迄は行かない)。 *mal'bela* 醜い。7) *sentas sin sola* 獨り在るが如き感じがする。淋しく感ずる。解釋上 *sin* と *sola* の間に *esti* を補つて考へると意味が一層明瞭になる。類例: *senta sin hejme* ~ *sentas sin esti en la hejmo* 家に在るが如く感ずる、打くつろぐ。8) *ĉirkaŭata* 取圍まれてゐる處の。*ĉirkaŭata* は文法上 *ŝi* に係るが、日本語としては副詞的に解されるのが普通である。類例: *Lasu min sola* 私を獨りにしておいて下さい、かまはないで下さい。9) *fremda* 第一義) 他國から來た、外國の。第二義) 見識らぬ。従つて *fremd'ulo* と云ふ場合にも、「外國人」と「一面識もない人」と云ふ二様な解釋が出来る。尤も *fremd-landulo* とすれば、第一の意味に限られる。例: *Mi estas tute fremda en tiu ĉi urbo* 此町は皆目不案内だ。10) *vir'safo* 牡羊、禽獸の名を示す言葉は大體其雌雄を含めて言ふのであるが特に雌雄を明示する必要のある場合には、第一) 雌だけに *-ino* をつけて區別す

のです。美しい自然 (*ĉarma naturo*) の中にあつても、すべてのもの (*ĉio*) が豊か (*riĉa*) で、彼女の氣に入る (*plaĉas al ŝi*) のです。

る場合と (例: *bovo*, 牝牛) *bovino* (牝牛): *koko*, *kokino*, *ktp.*) 二) 雄に *vir-* を冠して、其雄であることを強調する場合。(例: *vir'safo*, *virbovo* *ktp.*) さがある様である。(*virin'* を冠することは筆者寡聞にしてその例を知らぬ) 尤も *Zamenhof* は *vir'* を語尾につけて *bov'viro* とも言つてゐるから、どちらでも差支なからうと思ふ。11) *ŝi estas kiel la ĉefa feino* ~ *ŝi estas tiel, kiel la ĉefa feino estas* 彼女はまるで仙女の中の女王みないだ。「外見上……みないだ」と云ふ意味を表はす言葉を二三擧げて見ると、i) ...estas *kvazaŭ*... ii) *aspektas kiel* iii) *el'rigardas kiel* iv) *ŝajnas* (これは必ずしも外見に限らない)。12) *en'sorĉ'ita mondo* 魔法をかけられた世界。13) *pan'aĉo* 特に *aĉo* をつけた理由は、餓がはえて殆んど食べることも出来ない様になつたパンの事を言ふ爲で、パンそのものは之が爲に少しも變らない。類例: *rid'aĉi* ゲラゲラ笑ふ。 *vir'in'aĉo* あまツちよ。14) *plej bona lakto* 最上等の牛乳。 *plej* は最上級であるから、特定である可き筈であるが、嚴密に言つて必ずしも最上でない場合が多い。例へば、唯形容の語を強める爲に *plej* を冠する場合(次の例では *plej* は *diversaj* を修飾する)などはそれである。(例: *La ĉambro estis ornamita per plej diversaj meblaĵoj*……部屋はありとあらゆる家具類で飾られてあつた) この様な場合には、*plej* は *la* をさることも、さらないこともある。15) *por ne paroli pri* ~ *jam ne parolante pri* ……については話さずに、……については言ふも愚かなり。類例: *Li perfekte parolas en lingvoj angla, germana kaj franca, jam ne parolante pri* (*por ne paroli pri*) *Esperanto*。(エスペラントについては言はずもがな)。16) *delikata* i) きやしやな、繊細な。例: *delikata sano* ii) 上等な。例: *delikata viando* 上等な肉。iii) 感じやすい。例: *delikata homo* 人の感情をそこれない様に要心する細心家。17) *frago* 草莓。吾々がこれから店頭で見かける所謂「莓」は *frago* である。18) *miltelo* (*Vaccinium myrtillus*) こけももの一種。19) *frambo* きいちご、*frambo* と違つて橙々色を呈し、四五尺の木になるもの。20) *la norda naturo* 「北の自然」とは「北國の自然」の意。21) *regno* 王國、一國を統制する政府、法律を中心にして考へた國。22) *gracia* しなやかな、優雅な。

エスペラント中等講座

【La Patro】

(6)

Anton Ĉehov

La maljunulo ree desaltis kaj kuris en drinkejon. Ĝis Boris atingis kun la patro lian loĝejon, la maljunulo dufoje ankoraŭ desaltis, kaj la filo ĉiun fojon silente kaj pacience atendis. Kiam ili, forlasinte la veturilon, iris tra la longa, malpura korto al la loĝejo, konfuzita kaj embarasita fariĝis lia mieno. Li time kraĉotusis kaj ŝmacis per la lipoj.

【譯】 老人は再び跳び下りて居酒屋へ駈込んだ。ボリスが父親を宿へ送り届ける迄に、老人はそれから尙二度も跳び下りて行つたが、息子はその度毎に黙つて我慢強く待つてゐるのであつた。彼等が馬車を乗り捨てて細長い汚穢しい路次を通つて宿の方へ行つた時、老人はうるたえ、困つた顔付をして、こわごわ痰咳をして、舌打をした。

【註】 re'e=de'nove=du'a'foj'e = ankoraŭ'-foj'e 再び. de'saltis=saltis de la veturilo. atingis kun la patro lian loĝejon. 父親を伴つて(と共に)彼の(父親の)住家に到着した、茲では、「送りさどけた」の意。 du'foj'e=je du fojoj 二回、二度. du'a'foj'e (en la dua fojo) と區別すること。 ĉiun fojon その度毎に、其都度。 類例) Ĉiun minuton ŝi atendis kun espero kaj timo lian alvenon. 今来るか今来るかさ、(各分毎に、待つてゐた。 veturi'lo 乗物の總稱であるが、茲では、「馬車」のことを指す。 iris tra tra は往々 laŭlonge de (に沿つて)の意味に用ひられる。其時々により適宜に解釋する事に習熟せねばならぬ。 例) i) iris tra la strato. 街を通つて(通りに沿つて)行つた。 ii) iris trans la straton. 向側へ渡つた。 korto 中庭、こゝでは「路次」と言つた方が適當だらうと思ふ。 konfuz'ita 面喰はせられた konfuzi=perdi trankvilecon

per subita afero. embaras'ita 當惑させられた。 embarasi=kaŭzi malfacilan situacion. kraĉo'-tusi kraĉi 痰などを吐く. tusi 咳する。従つて kraĉ(o)tusi は老人などによく見る「痰のかゝつた様な咳をする」こと。 ŝmaci 音を立てて(接吻する)。

—Borenka,—diris li per flata tono,—se mia edzino diros al vi ion, vi ne atentu kaj... estu des pli ĝentila por ŝi. Ŝi estas mal-delikata kaj malrespekta, tamen bona virino. En ŝia brusto batas bona, varma koro!

【譯】 「ポーレンカ」と彼は阿諛ふ様な調子で言つた。「俺の因業婆さんがお前に何か言つても、聞流しておくんだよ。…そして尙更愛想よくしてやつてお呉れよ。あれは無精で恥知らずだが、根はいゝ女なんだから。腹の底は親切な暖い人間なんだ。(彼女の胸の中には、よい、暖い心臓が鼓動してゐる)。

【註】 flat'a 諛ふ様な。 ne atentu 注意するな、氣に留めるな。 estu des pli ĝentila. (言ふ事には耳を借さないでも。) 親切だけはもつと盡してやつて呉れ mal'delikata 粗暴な mal'respekta ぶしつけな。

La longa korto finiĝis, kaj Boris eniris en longan vestiblon. La pordaj hokoj ekkrakis, la venintoj eksentis la kuirejan odoron, la samovaran haladzon kaj ekaŭdis laŭtajn voĉojn. Trapasante la kuirejon, Boris vidis nur la fumon, ŝnuron, sur kiu pendis la tolaĵo kaj la tubon de l' samovaro, el kiu supreniris oraj fajreroj.

【譯】 細長い路次が盡きると、ポーリスは或る長い玄関を入つて行つた。戸口の蝶番がぎいぎい鳴り、訪問客は臺所の匂ひとサモワールの悪氣が鼻をつくのを感じ、高い話聲を聞いた。臺所を通り抜け乍ら、ポーリスは煙と、洗濯物をつるした縄と赤い火花が飛散つてゐるサモワールの煙突の外には何も見なかつた。

【註】 finiĝi fini は「終へる」(他動詞) 従つて finiĝi は「終る」、fino (他動詞的概念の名詞)、と finiĝo (自動詞的概念の名詞) とは區別して欲しい。pordaj hokoj これは「帽子掛用に取りつけられた鉤」の意でなく、「戸そのものを支へる鉤」の蝶番である。序に蝶番には ĉarniro と云ふ文字がある。ven'into 來着者、こゝでは來訪者、haladzo=malbonodora venena gaso, eliganta el brulanta korpo. 悪氣、こゝではサモワールの煙つてゐる臭ひ。tol'ajo 下着類。supre'n'iri 昇る。

—Jen estas mia kaverno,—
diris la maljunulo, kliniĝante kaj
enirante en malgrandan ĉambreton
kun malalta plafono. La
atmosfero pro la apuda kuirejo
estis terure sufoka. Ĉe la tablo
sidis tri virinoj kaj regalis sin
reciproke. Vidinte la gaston, ili
ekrigardis unu alian kaj ĉesis
manĝi.

【譯】 「此處が俺の穴さ」と老人は腰をかがめて、天井の低い小さな部屋の中へ入り乍ら言つた。臺所につづいてゐる爲、恐ろしく噎せ返る様な零圍氣がただよつてゐた。卓子の處には三人の女が腰を下して、それぞれ何か食べてゐた。お客の姿を見ると、彼等は目を見合せて食べるのを止めた。

【註】 kaverno 洞穴。klin'igi~sin klini (腰

をかどめる。pro la apuda kuirejo 隣の臺所の爲に。regali sin reciproke 互に自らを饗應する。

—Vi ricevis?—demandis severe
unu el ili, supozeble la „maljuna“
mem.

—Mi ricevis, mi ricevis,—
murmuris la maljunulo.—Nun,
Boris, sidiĝu, mi petas. Simple
estas ĉe ni, ni amas la simplecon.

Li senbezzone mastrumis en la
ĉambro. Li hontis la filon kaj
samtempe li volis kiel ĉiam sin
montri senĝena kaj ludi rolon de
malfeliĉa, forlasita patro.

【譯】 「お前さん貰つて呉れたらうれ」とその中の一人が、多分例の「因業婆さん」らしい女が烈しい權幕で尋ねた。

「貰つたよ、貰つたよ。」と老人は呟いた。「さあ、ポーリン、坐つておくれ。此處ぢや作法ぬきなんだ。俺達は作法拔が好きなんだ。」

彼は部屋の中で入りもしないお節介を焼いた。彼は息子に對して恥しい思ひをしてゐたのだが、又同時に又彼は例の通り屈託のない装ひをして不幸な見棄られた父親の容子を見せ度いと思つてゐるのだつた。

【註】 la „mal'juna“ mem. 「因業婆さん」その人。simple estas ĉe ni. 俺達の處では簡単にやるんだ。sen'bezzone (不用に)。mastrumi 家政を司る。hontis la filon (前置詞省略の目的格)=hontis al la filo. kiel ĉiam 平常通りに。ludi rolon de の役目を果す。(不幸な、見棄られた父親に)なりすます。

Apud laboristino k. c.

Kijoŝi Koizumi

Apud laboristino
Mi staras apud kudrmaŝino
Kaj rigardas laborordon
De la juna kudristino,
Kiu vive turnas radon.

Sed en mia koro daŭras
Penso al ĝi indiferenta,
Kvazaŭ ia monstro kaŭras
Ĉiam kreskas ĝi turmenta.

Kiel povus ĉi destine
Treni vivon kun ĉagreno?
Persekutas min obstine
Nedirebla kor-spleno!

Turniĝas rado unutone
Kuras la faden' enue,
Mallumiĝas jam duone,
Nokt' alpaŝas nin senbrue,

Subite!

Ho, karese milda spiro
Kaj mi vekite
Vidas ŝin kun nova miro.

Nun vidu, kiel ŝi kontente
Movas radon gaje vive!
Ŝi laboras tute silente
Tamen brave kaj naive.

Ŝi ne enuas la enuon,
Ne domaĝas la domaĝon...
Eble donas ŝi instruon
Al mi: „For la malkuraĝon!“

Ŝi ja aspektas ne tre bele,
Kaj videble ne tro klera

Tamen kiel brilas hele
La mieno tutlibera!

Jen vidu bone, mi ne blindas:—
Tra malbela la gracion;
Malklereco enviinda
Mokas ja balastan scion.

Trankvile la laboristino
Radon gaje vigle movas,—
Kuras la faden' sen fino,—
Kion fari ŝi nun provas?

Jen, forte, sane, ŝi nur spiras,
Nova sento efektive,
Ho, profunde min inspiras,
Ĉio brilas jam tre vive!

Mi havas ja tro multe

Mi havas ja tro multe
Paroli nun al vi,
Kaj vane provas stulte
Eldiri ĉion ĉi.

Ĉu povas vi kompreni
Embarasatan min?
Do, volu mem diveni
Jam ĉion; ho fratin'!

Pri hipokrito

Tro riproĉu ne la hipokriton,
Indas iam li admiron
Sed riproĉu pli ermiton
Li ne indas eĉ satiron.

Tradukoj de kelkaj "Haiku"

枯枝に
鳥のさまりけり
秋のくれ

(芭蕉)

Ĉe nuda branĉo
Ja korvo venis nun,—
Ho, fino de aŭtun'!

(Baŝô)

静けさや
石にしみ入る
蟬の聲

(芭蕉)

Plena ja trankvil'
En la ŝton'
Penetras son'
De l' cikada tril'!

(Baŝô)

ほとゝぎす
大竹原を
漏る月夜

(芭蕉)

Kriis ja kukol',
Tra granda bambuar';
Ho, luna la klar'.

(Baŝô)

雀の子
そこのけそこのけ
御馬が通る

(一茶)

Paseraj buboj, for!
For de tie! Marŝas nun
Ĉevalo de sinjor'.

(Issa)

AL EŬROPAJ ESPERANTISTOJ

Karaj samideanoj en Eŭropo!

Kun granda ĝojo kaj espero ni informis al vi pri la vizito de malnova kaj bona esp-isto S-ro Tokunosuke Ito, en la antaŭa numero.

Kaj nun ni denove havas ĝojon informi al vi, eŭropaj samideanoj pri la baldaŭa vizito al viaj landoj de S-ro Masao Suzuki, vicprofesoro de Ĉiba Medicina Universitato kaj unu el la plej kompetentaj kaj malnovaj batalantoj en esperanta fronto en nia lando.

Li vizitos ĉefe Germanujon kaj studos fiziologion en Regna



Universitato en Leipzig dum ĉirkaŭ du jaroj.

Sinsekvaj vizitoj de niaj bonaj esp-istoj al viaj landoj certe donos grandan efikon favore al nia movado, tion ni elkore esperas.

Kiel niajn reprezentantojn en vera signifo, vi, ĉiuj bonvole akceptu ilin kaj donu al niaj vizitantoj vian afablan helpon ne nur en nia lingva sfero, sed ankaŭ en iliaj specialaj studfako, tion ni forte atendas al vi.



Senlaboreco, monda tendenco.

Unu el la plej karakterizaj fenomenoj en la hodiaŭa mondo, estas la senlaboreco. Ĉiuj politikistoj nun devas almenaŭ esprimi sian kompatiemon pri tiu pli kaj pli graviĝanta problemo. Malluma, eĉ terura ombro de l' senlaboreco minacas ĉiujn landojn de la mondo, kaj pli kaj pli klare la problemo prezentas al ni sian gravecon.

Laŭ modesta statistiko de l' registaro en decembro de la lasta jaro, pli ol 150mil laboristoj estas maldungitaj en nia lando, kaj nun jam nia lando havas pli ol 500mil senlaborulojn kun malsatantaj iliaj familioj.

Ne nur fabrikaj laboristoj, sed ankaŭ inteligentaj oficaj laboristoj suferas tiun socialan malsanon. Iiaj vivoj mizeriĝas tagon post tago, sed kun tio pli kaj pli forte ili konscias akran kontraŭdiron de l' nuna socia sistemo.

En la tuta mondo svarmas pli ol 10 milionoj da senlaboruloj. Eĉ en Usono, kie prosperas nur gigantaj kapitalistoj, kiuj ricevas unuope miliardojn da dolaroj kiel profiton, ĝemas ĉirkaŭ 3 milionoj da senlaboruloj.

Kia kontrasto ironia al t.n. ĉiam prosperanta lando! En marta senlaborula tago, ĉie en Usono senlaboruloj demonstraciis sub direktado de usonaj komunistoj.

Certe la principo de kapitalisma ekonomio lasas nenie escepton.

En Anglujo, pli ol 2 milionoj ankoraŭ suferadas senlaborecon, kaj la registaro pagis al ili ĉ. 100 milionojn da funtoj sterlingaj dum pasintaj 10 jaroj. Sed tiom da elspezo donis al laboristoj neniom da pliboniĝo.

En nia lando raciigo de l' industrio pliiĝas la nombron de senlaboruloj. Ĉar la raciigo signifas unue malmultigi salajon, pagatan al laboristoj kaj oficistoj, forpelante superfluajn laboristojn kaj postulante al restintaj laboristoj pli da streĝigon de laborado, due pli bonigi maŝinojn aŭ aliajn produktmetodojn, kio ankaŭ nepre naskas senlaborulojn.

Kial oni faras tian raciigon? Ĉar kapitalistoj devas ricevi profiton por sia instalita kapitalo, kaj por tio ili pli ekonomias la entreprenon, por ke ĝi nasku pli da profito en la kosto de laborista vivo aŭ por ke ĝi mem ne suferu bankroton.

Mekaniko de l' kapitalismo mem devigat tion al ili, kaj la kapitalismo naskas pli kaj pli multe da senlaboruloj laŭ sia evolua principo mem.

Kaj senlaboruloj tagon post tago pliiĝantaj ne povas havi konsumpovon por varoj vendataj de kapitalistoj, sekve malpliigo de konsumpovo por varoj rezultigas pli da malgrandigo de kapitalistaj entreprenoj. Nome, varoj abundiĝas, sed aĉetantoj ne

[世界的傾向トシテノ失業]

senlaboreco 失業
karakteriza 特徴的
fenomeno 現象
politikisto 政治家
kompatiemo 同情
problemo 問題
graveco 重要性
modesta 控え目ノ

statistiko 統計
maldungi 解雇スル
senlaborulo 失業者
fabriko 工場
inteligenta 知識的
kontraŭdiro 矛盾
sistemo 組織
svarmio 群ル
giganta 巨大ナ

demonstracii 示威運動ヲスル
direktado 指導
funto sterlinga 英貨ポンド
raciigo 合理化
streĝigo 緊張、強度化
produktmetodo 生産方法
instali 投資スル
entrepreno 企業
en la kosto de...ヲ犠牲ニシテ

multiĝas, malgraŭ ke senlaboruloj malsatiĝas kaj rapide mizeriĝas en vivado. Kiel ĝian bonan ekzemplon, ni povas citi la cementar-industrion en nia lando, kiu limigis produkt-kvanton je duono de ĝisnuna kvanto, ne malaltigante prezon, sed pliiĝante maldungitojn.

Enlanda stato prezentas al ni tia kaj ankaŭ en eksterlando la afero estas sama.

En ĉiu lando abundas varoj kaj pliiĝas la nombro de senlaboruloj, kaj ĉiu lando altigas doganon por bari enportadan de ali-landaj malkaraj varoj.

Hindio lastatempe altigis doganon por japan-aj teksaĵoj kaj japana teksa industrio suferos pro pli da abundiĝo de sia produktaĵo. Nia lando ankaŭ altigas doganon por ĉia varo, kia minacos japanan industrion. Laŭ doganista rigardo, ĉiu lando nun staras en feŭda sendependeco kaj tia stato fine kondukos nepre ĉefajn landojn al la mitito.

Konklude, kia estas la afero?

Tutmonda tendenco de senlaboreco kondukas la vivon de proletoj al pli mizera stato kaj kune kun tio ilia kontraŭeco al la nuna ekonomia sistemo pli fortiĝas, ili konscios pri sia klaso en pli da firmeco, kiu devas batali kuraĝe kontraŭ la kapitalista klaso por konstrui pli racian, luman socion. Tia prosperanta senlaboreco klare montras al ni fakton, ke la kapitalismo alproksimiĝas al sia krizo.

Kelkajn esperantan raporton pri la senlaboreco ni prezentas al vi jene.

En Polujo

(Esperanto-servo) Metalfandejo en Silezio haltigis la laboron kaj maldungis kelkcentojn da laboristoj. Ankaŭ la metalfandejo Laŭro

en Siemianovice reduktis laboron ĝis 4 tagoj en semajno. En la tuta industrio silezia, en daŭro de unu semajno (12—19 Jan. 1930) 20 laboristoj perdis laboron.—Direktoro de buĉejo ricevas monate ĉ. 620 dol., dume popolinstruisto perlaboras 25 dol., ministro iom pli ol 25 dol., (diferenco rimarkinda)—laŭ lasta oficiala informo de la statistika oficejo en Polujo estas nun 106,348 senlaboruloj (certe laŭ minimuma enketo).

En Germanujo

(Esperanto servo) La 27-an de jan. entreprenistoj en saksaj minejoj enkondukis la "kvintagan" laborsemajnon, t. e. la ministoj devas festi du tagojn en la semajno, do ili laboras nur kvin tagojn. Ilia vivstato, antaŭe jam sufiĉe mizera, fariĝas ankoraŭ pli terura.

En tuta Germanujo la nombro de senlaboruloj pliiĝas iom post iom kaj en jan. ĝi atingis al 3.229 milionoj.

En Usono

Nun en Usono problemo pri senlaboreco fariĝis tre urĝa. Monaton post monato grandiĝas la cifero de senlaboruloj kaj nun sin trovas pli ol 3 milionoj. La registaro trovas ĝian kaŭzon en teknologia senlaboreco, kio estas, ke per senĉesa plibonigo de maŝinoj, pliiĝas la nombro de maldungitoj, kaj kompare kun la stato antaŭ kelkaj jaroj la nombro de laboristoj malpliiĝis je 3.5 milionoj, sed produktado pliiĝis je 25 elcento. La raciigo de l' industrio alportis tian rezultaton al la usona ekonomio.

mekaniko カラクリ

konsumpovo 消費力

varo 商品

kvanto 量

cemento セメント

dogano 關稅

teksa industrio 紡績業

feŭda 封建的

senlependeco 獨立

proleto 無產者

kontraŭeco 反抗

konscii 意識スル

kapitalismo 資本主義

krizo 危機

fandi 鑄ル

redukti 減少スル

direktoro 重役

buĉejo 屠殺場

popolinstruisto 小學教員

perlabori 稼グ

ministro 坑夫

enketo 調査

entreprenisto 企業家

enkonduki 採用ス

festi 祝ウ

urĝa 緊急ノ cifero 數字

teknologia 工藝的

kaj okuloj nigraj rondaj kaj allogantaj ridetante ĉiujn korojn, sed apud ŝi sidis Senhi kun vizaĝo iom malgrasa, kun ambaŭ vangoj kaviĝintaj kaj okuloj malgrandaj okulharoj longaj, kun mallargaj brovoj plenaj je kruelo kaj ĵaluzo. Ju pli la juna sopiranto rigardis Poksun, des pli li sentis ĉarmon kaj aŝablecon, sed kontraŭe la alia nur donis al li malafablecon kaj eĉ ion teruran. Kaj tial li detranĉis per tondilo la figuron de la nésatinda knabino, tamen ankoraŭ restis iom da ĝi. Por tute senigi li lerte duonnigrigis ĝin per nigra krapono. Kaj jen li ĝojis la leterojn, kiujn Poksun sendis al li de tempo al tempo. Ankaŭ Senhi sendis al li novaĵojn tre malofte.

(4)

Fariĝis somera libertempo, kaj sinjoro Kim revenis al sia hejmo en Seoulo. Tiam Poksun estis en Seoulo, ŝi lernadis ĉi in alta virina lernejo. Aŭdinte lian revenon, ŝi lin vizitis kune kun ŝia amikino Senhi. Ilin li akceptis kore kaj pri diversaj aferoj li jen demandis jen parolis. Ili estis tre silentemaj kaj ĝentilaj de la naskiĝo, ili kun ridetoj sur la vizaĝoj nur aŭdis lin, kaj ili mem ne parolis multe. Kiam li demandis al ili, kiel ili interesaj estis en la nuna lernejo, precipe en la ĉefurbo Seoulo. Kun rememorigaj mienoj ili respondis al li, ke la plej interesaj tagoj estis en la elementa lernejo, kiam ili estis instruitaj de li.

Por plezurigi la malnovajn amikinojn li elprenis el la kofro bildaron kaj albumon kaj ilin metis antaŭ ili, kaj li eliris el la domo aĉeti iom da melono por regali

ilin. Kun melonoj li rapidis al la domo, lin kaptis subita penso, kia tondro, ĉar li senvole forlasis al ili la albumon, en kiu li gluis la fotografiaĵon de Poksun tondile disigita de la amikino. Kun granda konfuzo kaj kora bedaŭro li eniris en la ĉambron, li trovis, ke mure ili nur sidis kun la vizaĝoj iom ruĝigitaj, certe venis ŝanĝoj inter ili. La bildaro kaj albumo forĵetigis flanken, kvazaŭ forgesitaj. Leviĝinte ili petis de li adiaŭon.

Per afablaj vortoj li ĉiel ilin haltigis kunmanĝi la melonojn, sed ili foriris tuj post iom da manĝo. Bonsendinte ilin li trovis, ke la fotografiaĵo estis tute deprenita.

„Kiu ĝin deprenis? kaj kiu ĝin kunportis?“ li nur demandis al si mem.

(5)

En la aŭtuno sinjoro Kim denove veturis al Tokio. Kaj post du monatoj li ricevis de Pok-un tre simplan leteron, en kiu ŝi kunmetis sian fotografiaĵon, kaj ŝi sciigis al li, ke ŝia amikino Senhi venis al Seoulo en la komenco de la nova kurso, sed ŝi baldaŭ revenis al sia hejmo pro la malsano pulma.

Kiam li legis la sciigon, li ekpensis la malsanulinon, kiu lin vizitis kune kun ŝia amikino Poksun en la pasinta somero, kaj antaŭ li denove figuriĝis la malfeliĉa knabino kun nigra vizaĝo kaj okuloj larmintaj, kun la lipoj forte fermitaj. Li eliris la tirkeston kaj serĉis, troviĝis ankoraŭ pecetoj de ŝia fotografiaĵo distondita de li mem. (*Fino*)

GRACIA

—Historia Dramo—

Verkita de Kasecu Fufisaŭa

Esp-igita de M. Hata kaj T. Murakami

PERSONOJ

Gracia	(Sinjorino de Hosokaŭ -Tadaoki— Daimio)
Ogasakaŭara-Ŝoosai	(Vasalo de Hosokaŭa)
Kaŭakita-Iŭami	(")
Hajami-Sanzoo	(Vasalo de Kaŭakita)
Hacuŝmo	(Favorata servistino de Gracia)
Ĉooken	(Bonzino)

Kelkaj orfoj kaj servistinoj por la sinjorino.

LOKO

En la domo de Hosokaŭa-Tadaoki en Oosaka.

TEMPO

La 17-a de Julio en la 5-jaro de Keiĉoo (1600).

HISTORIA KLARIGO

Tojotomi-Hidejoŝi, granda generalo konstruis kastelon en Oosaka kaj tie loĝante regis tutan Japanujon. Kiam li mortis, lia heredanto Hidejori ankoraŭ estis tro juna kaj ne kapablis regi. Laŭ la komi-

sio de Hidejoŝi, la ĉefminiŝtro Tokugaŭa-Iejasu helpis la junan sinjorinon Hidejori kun aliaj altranguloj, inter kiuj sin trovis Iŝida-Ĝibuŝoo kaj ĉiam sin tenadis malpaca kontraŭ Iejasu.

Iejasu mem estis tre ambicia kaj havis deziron ribeli al Hidejori kaj mem regi la tutan landon. Hosokaŭa-Tadaoki, edzo de Gracia, estis la plej fidela amiko de Iejasu kaj ne ŝparis helpon al lia ambicia intrigo.

En tia cirkonstanco uragano ne povas ne okazi!

Uesugi-Kagekacu, feŭda sinjoro de Aizu, kiu estis urbo tre malproksima de Oosaka, ribelis kontraŭ Hidejori. Kaj Iejasu iris al Kantoo-distrikto por batali kun Uesugi. Kelkaj daimioj akompanis al la militiro de Iejasu, restigante garantiulojn en la kastelo de Oosaka, ĉar Iŝida-Ĝibuŝoo tion devigis al ili.

Kial Ĝibuŝoo postulis garantiulon? La kaŭzo estas jene:—Li intencis, dum la foresto de Iejasu, frakasi lian intrigon kaj lin pereigi. Se li tenas kiel garantiulon en la kastelo edzinon aŭ filon de la daimioj, kiuj akompanis al Iejasu, li povas malhelpi tion, ke la daimioj kuraguŝ aldoniĝi al la armeo de Iejasu kaj turni lancon kontraŭ Hidejori.

Hosokaŭa-Tadaoki akompanis al Iejasu ĝis Kantoo-distrikto, restigante sian edzinon Gracia en Oosaka. Antaŭ ol deklari militon kontraŭ Iejasu, Iŝida-Ĝibuŝoo volis teni Gracia en la kastelo kiel garantiulon, sed ŝi ne obeis sed preferis sinmortigon.

Kial ŝi sin mortigis? Estas kvar gravaj kaŭzoj.

(1) Ŝi estis kristanino kaj kredis ĉielan vivon.

(2) Ŝi estis filino de Akeĉi-Micuhide, kiu estis malestimata kiel uzurpanto. Ŝi ĉiam sentis honton je la malhonoro de la patro, kaj ŝi timis, ke se ŝi fariĝus garantiulino, oni ŝin malestimus, dirante, "Ŝi estas filino de la uzurpanto, do estas nature, ke ŝi ne ofendentas, sed malkuraĝe fariĝis garantiulino."

(3) Ŝi havis kuraĝon kaj firman karakteron kaj estis racia.

(4) Ŝi vivis en la atmosfero de Buŝidoo (Japana kavalira moralo), kiu in-truas, ke se oni trovas antaŭ si nur du vojojn; nome ofendiĝon kaj sinmortigon, rifuzu la antaŭan kaj preferu la lastan.

— Sceno Unua —

Salono en la domo de Hosokaŭa.

Vespere de la 17-a Julio 1600.

Orfoj Senĉijo, Gaŭoo-maru, Kameŭaka-maru, Goboo-maru kaj orfinoj Mantoku, Siragiku interdisputas.

Kameŭaka kaj Gaŭoo interbatalas; tion Senĉijo kaj Goboo penas pacigi, aliaj timeme ploretas.

Bruo de vento.

Kameŭaka:—Manon for! Vi obstina Gaŭoo!

Gaŭoo:—Vi mem! Vi mem estas obstina! Ĉi tiun ventumilon Mantoku pruntedonis al mi.

Kameŭaka:—Ne mensogu! (turnante sin al Mantoku) De vi pruteprenis mi mem, ĉu ne? Ĉar Mantoku tre bone ludis la danemuzikon, k'iu ni lernis lastan vesperon, Siragiku deziris takti kaj mi deziris danci per la ventumilo; sed vi min malhelpas, mokante min pro mia malpliag'co.

Gaŭoo:—Do, vi mem scias vian malpliag'con, kial vi arogante kondutas antaŭ mi? Ii, vi sengepatra bubaĉo!

Kameŭaka:—Vi mem estas sengepatra! Vi intencis nin embarasigi per via diabla malhelpo.

Gaŭoo: Mi ne malhelpas, sed vi!

Kameŭaka:—He! Vi ankoraŭ insistas! Manon for, manon for! Ĉesu vian obstinaĵon!

Goboo:—Hej, Kameŭaka kaj Gaŭoo! Se nia mastrino aŭdus...!

Kameŭaka:—Mi ne timas la mastrinon, ĉar mi estas justa. Kial ŝi riproĉus min?

Gaŭoo:—Neniel vi estas justa! Mi mem estas justa.

Kameŭaka:—Ne! Mi estas justa!

Gaŭoo:—Ne! Mi estas justa.

Senĉijo:—Jam ĉesu disputadon kaj reciproke forigu manojn.

Pli kaj pli laŭtigas ilia disputado. Knabinetoj nur ploras konfuzi e.

Siragiku:—Hej, venu iu ĉesigu ilin!

Mantoku:—Ho ve! Mia ventumilo jen rompiĝos!

— Sceno Dua —

De maldekstre laŭ la verando sin montras Gracia, edzino de Hosokaŭa-Tadaoki, tenante en siaj brakoj unujaran orfeton.

Sinjinorino:—Ho! Dio mia! Denove vi disputas furioze pro bagatelajo! Kvankam vi estas knabetoj, vi jam

sufiĉe kreskis por esti prudentaj. Dum vi devas ami unu la alian... Kaj kiaj kompatindaj kn. betoj!

Ĉiuj orfoj houtiĝas.

Gaŭoo:—Mi estas kulpa, bonvolu pardoni min, sinjorino.

Kameŭaka:—Ne, kulpa estas mi mem, bonvolu pardoni min, sinjorino.

Sinjorino:—Bone, nur se vi ludas kune sen disputo. Iru en vian ĉambro kaj ludu paceme la triaktron kiel kutime, ĉar restas sufiĉe da tempo ĝis la preĝhor.

Kameŭaka:—Jes, ni ludos paceme, sinjorino. Ankaŭ mia Gaŭo-maru, ĉu ne?

Gaŭoo:—Jes, nur ne koleru, Kameŭaka, ĉar miaflanke mi kore amos vin.

Kameŭaka:—Kompreneble! Kial mi kolerus? Nu, hej Goboo, Senĉijo, Ŝiragiku kaj Mantoku.

Senĉijo:—Ni ĉiuj kune...

Goboo:—Iru en la najbaran ĉambro.

Ĉiuj orfoj estas forirontaj.

Sinjorino:—Miaj geknabetoj! Mi ripete admonas ke vi estu neniam disputemaj kaj interbatalemaj.

Senĉijo:—Jes, sinjorino, ni bone komprenas.

Kameŭaka:—Je Dio, ni amos reciproke.

Ĉiuj orfoj kune foriras dekstren.

— Scene Tria —

Sinjorino (sekvante ilin per vido)

Ĉiaokaze ili estas ĵaluzaj kaj emas interlatali, kolerigante pro bagatelaj, kiel ordinare ĉe ĉiuj orfoj. Maltrankvila estas mi pri ilia estonteco, kvankam mia penado kre-kigis ilin ĝis nun. Kie kaj kiel vivas iliaj gepatroj? Kompatindaj orfoj ili estas!

Ekploras la bubeto en siaj brakoj.

Sinjorino:—Ho! Kiel? Mia amata! Jes, eble ĝi malsatiĝis. Hej, venu iu ajn!

Sia servistino venas.

Servistino:—Jes, kiel mi povos servi?

Sinjorino:—Pretigu lakton kiel kutime, mi petas.

Servistino:—Jes, bone, sinjorino.

Ŝi foriras.

— Sceno Kvara —

Favorata servistino Hacuŝimo venas de maldekstre.

Hacuŝimo:—Ha! Mi trovis vin, via sinjorina moŝto! Mi serĉadis vin de ĉambro al ĉambro.

Sinjorino:—Kien vi havas al mi diri?

Hacuŝimo:—Ĉooken la bonzino, kiu vizitadas vin ofte, ĵus venis kun iu sekreta misio kiel senditino el la kastelo. Kiel ni aranĝu? Vian instrukcion mi petas

海外報道

伊藤己酉三

Sebert 將軍逝去

1月25日 Sebert 將軍は Paris に於て逝去せらる、享年92歳。

苟くもエスペラントの歴史を學んだ者は將軍を初期の我運動の第一線に見出すであらう。そしてそのエスペラントに對する確固たる信念、絶えざる奮闘に對して多大の感謝と感激に充されるのであらう。殊に佛蘭西エス界に於て終始一貫して指導の位置にあり今日の隆盛を招致し、又 Centra Komitato の設立によつて世界運動の中樞となし我運動の聯絡を取らしめたのは特筆に値する。將軍は1840年生れ工業學校に學び少尉として海軍に入り獨佛戰爭には Paris の防禦に當つた。その後主に砲兵隊の技術者として種々發明をなし、又彈道學に於て種々の法則を發見して科學者として知られるに到つた。1890年退役となり工業界に重要な位置を占めたが、功績により、レジオン・ド・ヌール章を授けられ、又科學上の貢獻の爲各國の勳章(日本よりも)を授けられた。1892年科學學士會員に選ばれてよりエスペラントに興味を持ち、1898年には學士院にエスペラントに關する報告を提出した。1905年には Centra Oficejo を設立し Oficiala Gazeto を發行し、Ido による危機に際して大いに役立つた。將軍のエス運動に公に参加した最後は1924年の科學及工業に對するエスペラントの利用に關する萬國會議であつた。この偉大なる先驅者の努力は今日の隆盛を來し、永久に我等 nova generacio の記憶に止るべきである。

エスペラントを學生間の通信に

Coopération Intellectuelle (Intelektu Koop-erado)の發案により巴里に Comité Permanent de la Correspondance Scolaire Internationale (Konstanta Komitato por Interlerneja Korespondado)が設けられた。委員長は M. Garnier 教授。この委員會は國際的に學校間の通信を取次ぐ目的で獨逸、英國、亞米利加、佛蘭西、伊太利、瑞西、ルーマニヤが參加してゐる。

昨年12月に、和蘭にこれに協力すべく委員が設けられたがその目的は21歳までの學生間の個人的通信を仲介するにある。この委員は又通信をエスペラントで媒介する事を承認し、幹事の M. Nieuwenhuis 夫人は熱心にエスペラントを學んでゐる。

世界中の教員、學生はこの際大いにエスペラントの効果を示すに協力せられ度い。その爲には S-ino M. Nieuwenhuis: Jan van Goyenstraat 44, Leiden, Nederlondo 宛に姓名、性別、學校、住所、保護者の職業何に就いて通信を希望するかを申出られ度い。

リヒテンシュタイン公國の宣傳

リヒテンシュタイン公國の政府はこの美しい國の風景を世界に紹介する爲に繪葉書を發行す事に決した。繪葉書の説明は獨逸語とエスペラントを用ひる事になつた。

芬蘭社會民主黨の エスペラント支持

芬蘭の社會民主黨大會に於て次の如き決議がなされた。

1. 黨大會は國際語の觀念を普及せしめ、労働者間のエスペラント運動の進歩を知らしむる爲機關紙を以前に増して必要とする。
2. 黨大會は議會の黨員に對し、エスペラントを中等學校の隨意科となす事を發案する様勸告する。又各黨の黨員に對し、斯語を労働者學校の學科に採用する事を提案する動機有りや否やを考慮する様勸告する。

エスペランチストの國際休暇

昨年夏英國エスペラント協會は國際休暇を催し大成功を得たので、今年は三回催す事になつた。萬國大會に出席出来ない同志には最も好都合で、美しい景色に圍まれて愉快に一週間を過し同時に實地にエスペラントを使用する事が出来る。

第一回は佛蘭西の港 La Havre に於て4月下旬第二回は昨年と同様白耳義の Oostdijk-sur-Mer. 第三回は8月26日より9月3日まで伊太利の Como に於て催される。

第七回菜食主義者大會が Steinschönau (チエック) に開かれた。エスペラントの夕を催して大成功を収めた。萬國菜食同盟の會頭 Pürr 氏は74歳の老人であるが直ちに200名の聴衆の前でエスペラントを學び第八回大會ではエスペラントを挨拶する事を約し、Steinschönau の講習に参加して大いに進歩してゐる。又新しく選ばした幹事 Feix-Warndoz 氏も次回大會に利用すべく熱心に勉強してゐる。

瑞西案内書を申込まれ度し

瑞西 Bern の Svisa Ĝenerala Poŝta Direkcio, Direkcio Ĝenerala de la Federalaj Fervojoj (S. B. B.), Regiona Informoficejo (Verkehrsbureau), 及び Zürich の Svisa Centra Turisma Oficejo (Verkehrszentrale) は若しエスペランティストが希望するならば郵便自動車によるアルプス越え、旅行登山遊覽の案内に關する寫眞説明入の地圖、案内書を再出版し無料で配布する事を約束した。旅行者に限らず世界の同志は擧つて上記の事務所へ葉書で申込まれ度い。

我等同志の勢力を示す好機會である。

北歐エス運動の展望

瑞西では Andreo Ĉe 氏の努力により大なる進歩を來したが、尙ルーマニヤの T. Morarico 氏、印度の L. Sinha 氏、エストニアの H. Seppile 氏、諾威の R. Bugge-Paulsen 氏、最近にはエストニアより Pähn 夫人が到る所宣傳講演、講習をなし、普及に力めてゐる。

Sinha は昨年中に25,000名の聴衆の前に講演し尙5月まで續ける筈。瑞典では全體でエス語講演に50,000名の聴衆があり、15,000名はエスペラントを學び始めた。

教育者方面では、二年前には全くエスペラントに無關心であつたが最初は個人的宣傳によつて Stockholm の Ĉe-kurso に20名の出席者あり、彼等の勧誘によつて教員聯盟は1928年夏、全國の教員を講習に招いた。この時40名の参加者あり、この基礎の上に立つて議會に提案しその結果50名の教員が國費によつて教へられるに到つた。尙 Sveda Esperanto-Insti-

tuto を國立にする事が建議せられた。

實用的方面では瑞典よりエストニアへの遊覽旅行を組織しエスペラントで、休暇を楽しむ事を企てたが大成功であつた。その結果 E peranto Turista Komisiono (ETK) が生れた。この好成績により本年の Stockholm 博覽會の幹部はエストニアに於て行ふ廣告、悉く ETK に委嘱する事に決した。

又 ETK は博覽會に多數の同志を引寄せ、爲に主要な官廳其他に對しエスペラント講習を開く事を勧告し、電車従業員に對する六講習が開かれ、電話交換手に對しても講習が催された。今年の夏にはエスペラントで電話を掛ける事が出来る。

以上の如く瑞典に於ける進歩は實に目覺しいものである。これに對して他の國でも遅れないやうに努力しなければならない。

Internacia Stenografio と エスペラント

昨年 Potsdam に開かれた第三十一回 National-Stenografio 大會に於てエスペラントに關する決議が爲された。National-Stenografio (獨語用) の創案者 de Kunowski 氏はこれを少し變更して各國共通語の速記を作り、既に多數の使用者を得たので萬國協會を設立した。その規則第十一及十二條は、エスペラントを公用語とする事、及び會合出来る限り他の萬國大會と連絡して行ふ事である。

Potsdam の速記聯盟 Hevella は數年前より Potsdam のエスペラント協會と連絡して共通なる目的の爲に共同してゐる。

佛蘭西大學エスペラント 聯盟大會

昨年12月25日より28日まで Lyon に於て開催さる。Lyon 大學總長 Ghensi 氏は文部大臣の代理として出席し、市代表の出席もあつた。大會では初等、中等、專門教授の三部を設けることを決議した。聯盟會長 Prof. Coton は出席出来なかつたので宣傳文を起草し、Nice の L' Eclairer 紙、Grenoble の Le Petit Dauphinois 紙上に現れた。

道 報 地 内

エス語と希望社

★「希望」「のぞみ」「光と聲」「泉の花」「かゞやき」(盲人用點字雑誌)及「希望の日本」の六種の月刊雑誌を發行して全國に百萬餘の讀者を有する希望社主後藤靜香氏は既報の如く「光と聲」誌中にエス語講座を設け更に來る三月より月刊エス語雑誌「エスペラント」を發行する事になつた。同氏の經營する日本印刷學校及勤勞女學校にてはエス語を正科として教授し全社員(約二百五十名)に對しては一月末より一週二時間宛(日曜日午前七—八時、水曜日午後四—五時)社内講堂にて本學會々員石黒修氏指導の下にエス語講習を行つて居る。「希望の日本」二月號中「愈々世界的に進出す」と云う題下に後藤氏は國際語の普及に就いて左の如き意見を述べて居る。

『時が來た。もう人類に呼びかければならぬ時が來た。全日本を風靡して居る此の精神運動が國境を越える事に何の不思議もない。

我等は日本人であり同時に人類の一員である此の故に日本人としての勤めがあると同時に人類としての勤めがある。

人間と人間とが國を異にし民族を異にするが故に争いあい殺しあはればならぬ理由はない。大きい溝の出来る根本原因は互に理解し得ない事、而もその事を中心をなす理由は言語の相違にある。

英語は世界的に最も多く使はれて居るとは言え日本が英國の屬國であるかの如く到る所に和英相並べて記す屈辱をしたくない。又英語が英國以外の國民に對して快く受け入れられるものでない。

我々は世界人として國際語エスペラントを學ぶ義務を感じる。少くとも世界人としての意識に立つ時此の必要を感じる。併し英語に對してそんな義務も必要もない。

希望社の著書は續々エス語に譯する。従つてそれが英佛獨等に譯される。

日本の若人に漲る清き情操と新しき力ある國民運動の實際とが其のまゝに世人に知られる事になる。悦びであり又大きい責任を感じる。

新しくして日本エス語運動は嵐の様な勢で日本全土にひろまつて行く。』(宗近氏報)

東京

★全生病院エスペラントクルーボ——昨年5月にエスペラント講座が始められてから7ヶ月間休日以外毎朝6時より1時間宛研究、十數名の患者の他光田院長職員も加つて鹽沼氏の指導の下に行はれてゐたが、1929年12月28日年末祝賀會を催してこの紀念すべき我がエス語の誕生の年を送り、來らんとする1930年の前途を祝した。村の雑誌山櫻(患者自身編輯し印刷し消毒して外に出す月刊雑誌)に毎號エスペラント欄を作り、尙黒川氏はシベリヤの癩病患者の話“Fundo de Mizero”を同誌上に譯し、近々單行本として出す積、同志の御來訪を歓迎。數人でいらつしやつたらエス語歡迎會をやります。(武蔵野線秋津驛から十町)

★成蹊エス會——昨年十一月本校にエスペラント・モヴアードを復活した、小此木、菅野、川俣、富永の四君が愈々卒業されることになつたので、1月25日送別會を兼ね、第五回 generala kunsido を催した。

會するもの、校内の samideano に加ふるに、佐々城先生、岩下、守隨兩先輩を加へ、教頭大峽先生、片山、三上兩先生を圍んで午後二時から午後九時半に至る大送別會をおこなつた。おもふに、岩下、守隨氏等がおこしたエスペラント・モヴアードを輝しくも、復活して今や會員30名の盛大におもむかしめた四君も、最後の Kunveno まで大いに感慨無量の日であつたことと思ふ。

先づ成蹊校歌のエス語合唱に會をはじめ、自己紹介、更に、四君の感慨無量なる longa parolado をすませて、會場を生徒集會所にうつし、いよいよ餘興をはじめた。エスペラント劇“Honesta”(菅野氏作)。「解結此の如し」(重松君作)等、更に成蹊おごりをエス語の歌詞でおごり、鶴田君の作になるエスペラント踊りに會は最高調に達した。尙成蹊踊りのエス語は尋常科3,4年の samideanoj の合譯此くして verper-mangado, レコード等と九時に至るまで盛大に愉快にすごした。

★アルヂエンタ・クンシード(銀座『晴湖』にて)二月廿二日午後伊藤徳之助氏の送別會を兼ねて會するもの十八名エスペラントを話さぬ(もう忘れたのか)エスペランティストもちらほら見えて夕方まで快談。

三月八日夜總會を催す、連日の降雨にむしやくしやして居た連中好機來れりさうつぶんをはらしに來るワ來るワ、會場の狭さにも目もくれず。十時まで例の通り駄辯り通し。

★プロレタリア・エス講習會 プロレタリア科學研究所主催の下に3月10日より本所柳島セツツルメントにて労働者講習會開催、参加者40名、3月17日より新宿二葉保育園にて知識階級を目標に開催、参加者60名、何れも活氣潑潑として缺席者少く、プロ・エス運動の躍進的發展を思はせる元氣に溢れている。

横須賀

★三月一日林氏方に於て一九三〇年第一回初等講習會修了式を兼ね支部員の Amika Kunsido を催す、會する者講習修了者十二名、支部員十名、先づ林氏の開會の挨拶はエス語にて初まり續いて松葉氏のエス語の歴史及び世界の狀況横須賀に於ける發展振等に就き講演あり、自己紹介よ

高崎

★3月1日午後6時より第2回エスベラントの夕べを催す會するもの18名。會報「國際語」の質疑應答の外木戸又次氏の「國際語」掲載の練習文に就いての講義あり盛會裡に午後9時半散會せり。

大阪

★毎週火曜日七時より大江ビル、二階に於て研究會を行ひクレストマチーオを輪講す。二月十八日より別記報告の如く、講習會無料を行ひたる所初日十數名來會し、最終日に於ては十四名の出席あり、此他止むを得ざる事情の爲最終日のみ缺席する旨前以て申し出でたるもの二名ありたり。(最終日は復習のみ)。三月末に於ては、定款規定の春期總會開催の豫定。

福岡縣

★築上エス會 昭和3年5月創立、主として會費(10錢)を徵集なしエス語及びエス語研究用の書籍を購入なし各會員に借し毎週土曜の夜會長宅へ集合なし研究を續けて居る。會長は盲人にて同氏發



Adiaña Kunsido
en Seikei
Esp-ta Grupo

成蹊高校
エス・グループ
の送別會

り座談會に移り講習修了者の今後の指導方法に就き協議の決果各自の希望に依り支部入會者七名、學會入會者七名あり。横須賀エス會初まつて以來の好成績であつた、支部入會者は毎週土曜日午後七時より八時迄中等講習を催すことゝす、又當日山梨縣より移轉せられて大津に在住の學會々員三井氏夫人出席され直ちに支部員となられた。十一時閉會。

横濱

★ベルダ・ユピテーロ 毎水曜日午後六時半より伊勢佐木町有隣堂食堂の一隅で盛んにバビラーデしてゐます、先般來輪讀中のザ博士演説を終へたので次回よりは「中等讀本」を初める豫定です、吾等の「ヘトマーノ」清水氏も出席されて大いに皆で「アチューロ」振つて居ます、皆様の御來會を祈ります。

行の月刊點字佛教濟世軍雜誌に毎月2ページ又は3ページのエス語講習欄を附け一般盲人にエス語の宣傳を務めて居る。

福岡

★2月28日夕支那へ旅立つ村上知行氏の送別會を博多明治製菓食堂にて催した。江口幹事の送別の辭村上氏の謝辭會員のタプロパローロあり。盛會裡に10時閉會。

長崎

★3月13日京都の Japana Zamenhof, okulisto 中野忠一郎氏來崎。満月にて歡迎會を催して愉快な一夕を過す。淺田博士のお話によれば聲までザ博士令息に似て居られる由。15日長崎丸にて歸京。

洋行途上にある九大伊藤助教授を今度英國 Oxford に於て開かれる萬國大會 Somera Universitato の講師として淺田博士より Privaty

Kreuz 氏宛に推薦状を發送する。

4月15日ザ博士命日には紀念の催を開き、尙新聞に記念記事發表の豫定。

臺北

★甲斐三郎氏送別會 臺北高等學校教授甲斐三郎氏 (U. E. A. Vic. Deligito) は今回選ばれて、歐米各地に留學を命ぜられたので、その門出を祝福し、前途の幸運を祈る意味で、二月十六日午後六時から市内水月喫茶部階上で催された、會するもの十六名、西田正一氏一同を代表して挨拶を述べ、甲斐氏これに答へ、歡談數刻十時和氣靄氣裡に散會した。尙ほ氏は二月二十七日基隆發「みづほ」丸にて上京し、諸般の準備を整く、三月末シベリア經由にて歐洲に入り、ベルリンに滞在、後各地を巡歴し、明春米大陸を横斷して歸朝の豫定にて、専門研究の餘暇を利用して四月末ドレスデン及び八月初オックスフォードに開催される 에스語大會に臺北 에스ベラント會代表として出席する筈。



滿洲醫大 에스會

★初等講習會開催 二月十七日より十日間の豫定を以て、安田勇吉氏を講師とする 에스語初歩講習會が市内文教局濟美會館で開催された講習員三十五名にて、教科書は安田講師により新たに編まれたものを用ひつゝあり、本書は初歩講習後引續き研究に便なる様相當の譯物を輯録し、代價を付して一般同好者に頒つ由。

Adiaŭa Kunsido al
S-ro Murakami
en Fukuoka

福岡 에스俱樂部
の村上氏送別會
前列向て右より
2人目江口氏一
人をいて村上氏

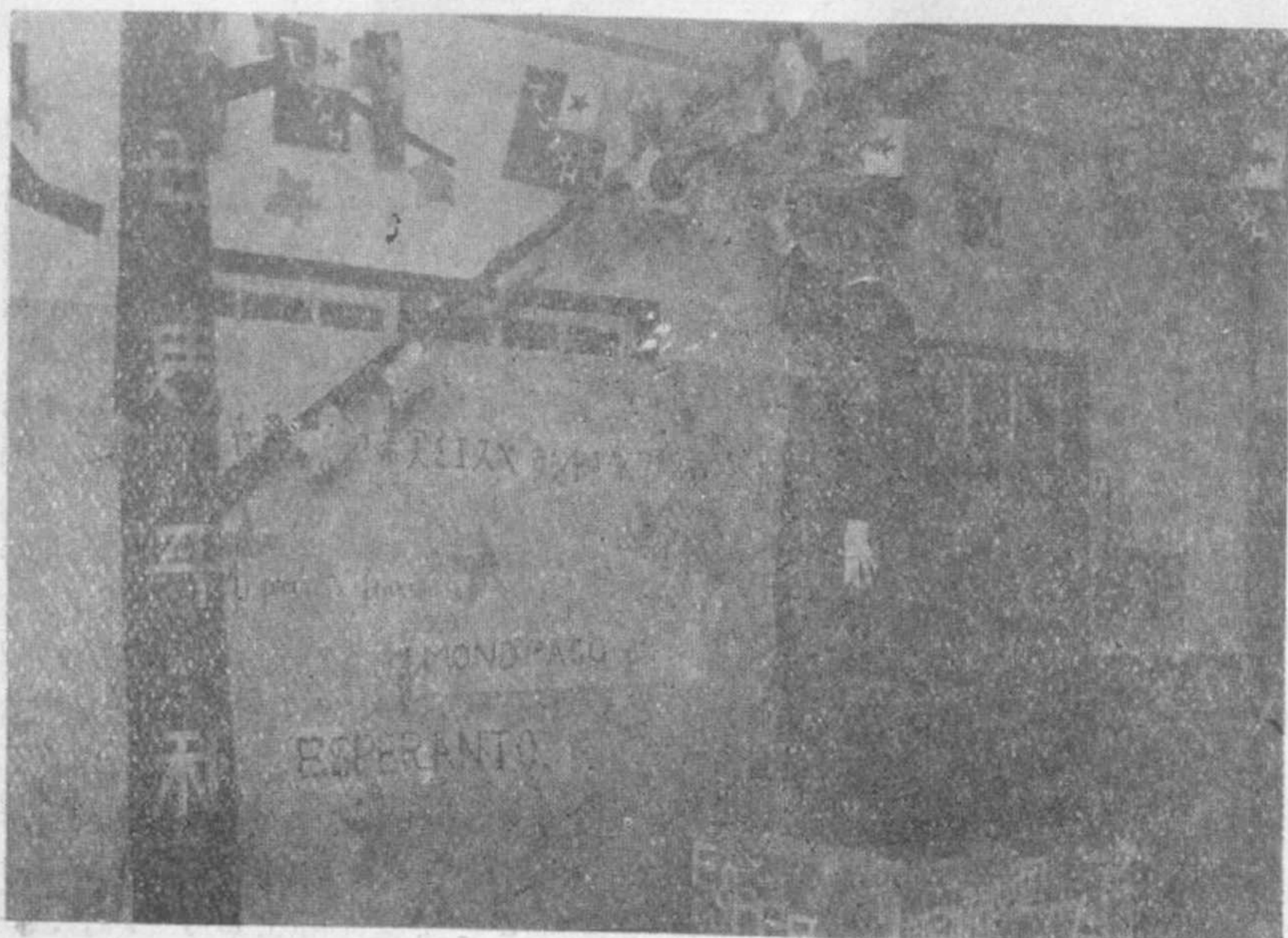


★

★

★

★



成蹊高校紀念祭
に於ける 에스ベ
ラント宣傳飾物
Esperanta ĉambro
en ekspozicio
de Selkel Gimnazio

編輯者の頁

◇編輯後記◇

1. Revuo 編輯の當番制がグルリグルリと一廻りして、そのたらいがドン尻に控えた餘り見榮えもしない拙者に廻つて來た。これで當番リレーのバトンが第一選手の手に戻るわけ。さて半歳の過去にわたる編輯當番制の成績わどうであらうか？一つにかゝつて會員諸君の批判に俟つ次第だ、だから大いに編輯局あてまじめな批判を送つて頂きたい。それによつて今後の方針や新しい plano が建てられるであらうから。

2. 本號は Zamenhof 13 回忌記念號としてそれに關する記事を三つほど載せた。もつと用意して種々な方面からの Z. の研究をのせるつもりであつたが、編輯者の病氣やら差迫つた雜事やら寄稿者の餘儀ない事情での約束不履行などで結局手もとにある材料を使用し得たにすぎなかつたのわ残念だつた。この點くれぐれも Z-a Numero に大な期待を持たれた方の御容赦を願う。

3. エス文藝特輯號としての前號に對して賛否いろいろの御意見があつたが、esp. が單なる知的玩具として淫せらるべき存在でわなく、國民的經濟を前提として人類に與えられた國語の理性的綜合であり、國境を超越して人類意識を昂揚し、人類文化史に新しき epoko を劃すべき使命をもつものである以上學習的研究より以上に esp. をわれわれの關心の對象とすることわ當然であらう。この點で前號の編輯——もちろんそれが軌範的なものわ言われないが——わ相當大きな暗示をわれわれに與えるものと考えられる。

4. 本號に於てわ前に於てザメンホフに關するもの三篇を挙げ、新しい立場からの言語の本質論を、それに續いて新しい視角に立つて發展しつゝある SAT 運動の意義と現勢の説明に、國際語の研究を添え、後半わ學習と報導に當てた。配列についてわ大體從前の通りでわあるが、前半に於てザメンホフの思想と esp. そのものの本質、及びその新しい運動について一聯の連絡ある理解を得られたならば幸甚である。

5. 世界が瞬時も靜止せず、常に新たな展開をなして行くものである以上われわれ esp-istoj も esp. そのものゝ本質的理解と esp. 運動の發展とに對して絶えざる關心を

持たねばならないことわ言うまでもない。今日に於て esp. わますます新しい運動形態を持ち、ますます新しい分野に入りつゝある。世界の esp. 運動の有力な一角をなす日本の esp. 運動に於ても、esp. わ新しい活動分野を得つゝ、次第にわれわれの文化的生活に浸透しつゝある。

6. でわれわれの最大の關心事たる日本の esp 運動に於て特徴的な變化が行われようとしていることを考えたい。Esp. 運動わ何ら生活から超然と獨立した運動でわなく、他のあらゆる文化的運動と等しくわれわれの實生活と結付けられてゐる一つの運動である。従つて時々刻々に變化し、進展して行くともあらゆる他の社會運動と何ら異なるところわない。しかし esp. なる言語を中心とするわれわれの運動わ直接に社會生活と接觸している多くの他の社會文化的運動と異つて、かなり高い人類生活の上層建築に屬する。が人類生活そのものの變化わ當然その反映をすべての文化的運動に見出す。でわ殆どすべてが知識階級から成立つてゐる日本の esp. 運動に社會生活變動の如何なる反映が認められ得るのか？

7. 現實の日本の知識階級の動向わ自己の階級の正しき批判及び階級意識の覺醒に向つてゐる。即ちプロカブルかえのより鮮明な所屬別の明示が現在日本の知識階級に要求されてゐる。そして社會矛盾の激化につれて知識階級わ次第に經濟的に没落して行くこともに現在の社會組織の欠陥を意識して來つゝある。

8. かくの如き知識階級の現勢わ必然にそれを基礎とするわが esp. 運動にも反映を見出さしめないでわ止まない。こゝに esp. 運動進展の上に考うべき問題が提出されるのである。ますますより深く人類の社會生活の核心に近づいて行くべき esp. 運動の當然出會われねばならない問題なのである、今やすべて日本の esp-isto の慎重に考慮しなければならない事實である。この Revuo が單なる言語技術をオウム返しに傳え合う一つの機械以上の何ものかを持つものである以上、この大きな根本的な問題について本號の編輯者わ讀者諸君のまじめな思慮を促してやまない。

(Justulo en Insulego)

對譯詳註叢書——第六篇出づ

★ ★ ★ ★ レイモント短篇集

伊藤徳之助 | 兩氏共譯並註解
松本清彦 |

三五版九十餘頁・美裝・價 40 錢 稅 2 錢

その作品「農民」の四部作を以て先年ノーベル文學賞を受領し全世界にその名聲をはせたる新興國ポーランドの現文壇の雄レイモントの短篇「終焉」及「阿片窟」の二篇を收載す。

譯註者は我國エス界の大家今更喋々の辯を費すを要しない。その譯文その註解共に我々學習者の好伴侶たるは言を俟たない。

エス語學習の秘訣を この叢書にてつかめ

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. マテオ・フアルコネ | 價 35 錢 稅 2 錢 |
| 2. ハイネ詩集 | 價 40 錢 稅 2 錢 |
| 3. 魔法使 | 價 40 錢 稅 2 錢 |
| 4. 代理通譯 | 價 40 錢 稅 2 錢 |
| 5. 愛あるところ神あり | (植字中) |

財團 日本エスペラント學會
法人

東京牛込新小川町 振替東京11325番

學會取次洋書目錄

★洋書は如何なる場合でも前金注文でなければお送り致しません★

新 着 書

定價圓(送料銀)

- ★Bulgara Antologio. Krestanov 編。ブルガ
リヤの名作詩、散文集。作者の寫眞入り絶版
物在庫多數。.....1.50 (6)
★Bulgara Lando kaj Popolo. Krestanov 著。
ブルガリヤの地理、歴史、國語、等を詳述せる
もの地圖入り。.....1.20 (4)
★El la Proksima Oriento. Krestanov 著。今
迄あまり知られてゐない近東の小國民(ウク

- ライナ、リトヴィヤ、エストニヤ、フィンラ
ンド、等)の歴史、文化等を説明したもの。...
.....0.90 (2)
★En Okcidento Nenio Nova. Remarque 著の
有名な「西部戦線異狀なし」のエス譯。既に
部數僅少、四月中旬には追加注文到着の豫定
.....上製 3.50 (10) 並製 2.50 (6)
★Kiel akiri bonan stilon.0.03 (2)

再 着 在 庫 書

.....特にお奨めする好適讀物.....

- ★Malriĉa en Spirito 原作家 Bulthuis の戯曲
脱走兵として死刑を宣告せられた Alberto が
刑執行の前夜秘かに母に會ひに歸へる。白痴
の弟 Johano は兄の軍服を着て營倉内に歸へ
り、翌日 Alberto でなくて白痴である事發見
されて放免となる。.....0.30 (6)
★Fatala Ŝuldo. 新進作家 Lionel Dalsace 著。
交霊術に巧みな過去を透視する婦人が説く因
果律を眼前に現す面白い小説。Teozofio に興
味を有する人の好個の讀物。.....1.10 (6)
★Johano la Brava. Petöfi 著。Kalocsay 翻
譯による詩體お伽噺、勇敢なる青年 Johano
が諸國を放浪して故郷に歸へれば彼の愛人は
既に此の世の人ではなかつた。傷けられた心
を抱いて彼は再び宛もなく旅に出て巨人、魔
女を征服し遂に仙女の國に到着すると思ひが
けなく愛人に出遇ひこの國の王として睦じく
世を送るさいふ筋、文章活潑。.....0.85 (2)
★La Paĝo de l' Reĝino. Praha に於ける第
13 回萬國エス大會の Postkongreso に Buda-
pest に於て演ぜられた喜劇。ある詩人が學士
院に推薦せられるべき戯曲に没頭してゐる中
に眠り込んで戯曲の表題の夢を見る、又家主
の銀行家の騒ぎが織込まれる。譯は Kalocsay
.....0.25 (2)

- ★Mimi. Giesy 著。Payson の老練なる翻譯。
大戰に出征した愛人を持つ Mimi の巴里カル
チエラタンに於ける悲慘なる生活、戦争に伴
ふ一悲劇。.....0.40 (2)
★Mondo kaj Koro. Kalocsay 原作詩集。著
者のエスペラントに對する感情、自然に對す
る憧れを吐露せるもの。.....0.25 (2)
★Tatterley. Tom Galton 作 Wilson 譯の小
説、吝嗇なる Kaleb Fry が死んだ下男 Tat-
terley として親族を欺いてゐたが自分の甥と
その愛人の美しい愛情に感化せられて生れ變
つたやうになり二人の幸福になつたのを見て
最後の息を引取るさいふ筋。.....0.55 (4)
★Sendaĝereco de Fraucujo. 佛蘭西前大臣
Honorat 氏著、前伊太利首相 Nitti 氏の
Danĝero de Eŭropo には大戰の根源及戦後の
不安に對して佛蘭西が最も大なる責任を持つ
事を暗示したのでこれに對する反駁の爲に著
したもので、本書は實に佛伊兩國の大政治家
同志の大論戰を示すものである。しかも逸早
く Nitti の原書をエス譯して發表したのに對
抗してこの機を逸せず佛國の同志が政府を動
かして出版したもの。.....0.50 (4)

ザメンホフ博士著書

- ★Aldono al la Dua Libro.....0.25 (2)
★Rabeno de Baĥaraĥ0.55 (4)
★La Rabistoj0.80 (4)
★La Revizoro.....0.80 (4)
★Ifigenio en Taŭrido.....0.80 (4)

- ★Hamlet0.70 (4)
★Andersen, Fabeloj 第二卷.....0.80 (4)
★Rakontoj el Biblio0.30 (2)
★Proverbaro Esperanta.....0.70 (4)
★Originara Verkaro.....7.50 内地(27)
植民地(55)

原 作 文 藝

- ★Saltego trans Jarmiloj2.85 (8)

- ★Bukedo I, II. 二卷で0.60 (4)

★Krioj de P' Koro 詩集.....0.15 (2)
 ★Lillo, Sinotte 夫人作小說.....1.35 (6)
 ★Vi, Sola, Esperanto.....0.18 (2)
 ★Modernaj Robinzonoj.....0.85 (2)
 ★Migranta Plumo 戲曲小說詩集.....1.50 (4)

★Laŭroj 名作集.....0.80 (4)
 ★La Tajdo, Hoblov の詩集.....0.66 (2)
 ★Du Rakontoj 小說二編.....0.30 (2)
 ★Stranga Heredaĵo 小說.....2.85 (8)
 ★Sep Rakontoj 小說集.....0.55 (4)

~~~~~ 翻譯 文 藝 ~~~~~

★Morto de Danton, A. Tolstoj.....0.85 (2)  
 ★Natan la Saĝulo, Lessing 劇.....1.00 (4)  
 ★Kio povas okazi 小說.....0.20 (2)  
 ★Songo de Somermeza Nokto 劇.....0.40 (2)  
 ★Portreto, Gogol 小說.....0.55 (4)  
 ★Luno de Izrael, Haggard 作.....1.90 (6)  
 ★Kallio Harn Alraŝid.....0.15 (2)  
 ★Barbra, Jerome K. Jerome 劇.....0.55 (2)  
 ★Malnovaj Paĝoj 小說集.....0.40 (4)  
 ★Faŭsto I. Komentario 二冊で.....0.80 (4)  
 ★Atta Troll ハイネの長篇詩.....0.80 (2)  
 ★Bombasto Furioza 喜劇.....0.10 (2)  
 ★Boks kaj Koks, Morton 喜劇.....0.15 (2)  
 ★Aventuroj de Lasta Abenceraĝo.....0.15 (2)  
 ★Camera Obscura 小說.....0.70 (4)  
 ★Mallumaĵo 小說.....0.20 (2)  
 ★Reĝo Lear 沙翁劇.....1.45 (6)  
 ★El la Landoj de Ruinoj.....0.12 (2)  
 ★Kaatje, Spaak 作の劇.....0.80 (6)  
 ★Sokrato 劇.....0.65 (6)  
 ★Advokato Patelin 劇.....0.30 (2)  
 ★R-U-R 劇『人造人間』.....1.00 (6)  
 ★Karavano, Hauff 作小說.....0.55 (2)

★Cavalleria Rusticana 劇.....0.35 (2)  
 ★Ok Noveloj 小說集.....0.55 (4)  
 ★Elekt. Humoraj Rakontoj.....0.20 (2)  
 ★Aelita, A. Tolstoj 小說.....1.70 (6)  
 ★Kantistino, Hauff 作.....0.40 (2)  
 ★Venecia Komercisto 沙翁劇.....0.80 (4)  
 ★Aspazio, Leono Zamenhof 譯.....0.80 (4)  
 ★Eĉ en Doloro ni estu ĝojaj.....0.35 (2)  
 ★Du Noveloj, Jokai 小說.....0.45 (4)  
 ★Sinjoro Vento kaj S-ino Pluvo.....0.40 (2)  
 ★Nevo kiel Onklo, Schiller 喜劇.....0.20 (2)  
 ★Malbela Anasido, お伽噺.....0.05 (2)  
 ★Ŝakludado 劇.....0.35 (2)  
 ★Verdaj Fajreroj 詩集.....0.40 (2)  
 ★Halka 歌劇 Grabowski 譯.....0.45 (4)  
 ★Amfitriono, Molière 喜劇.....0.55 (4)  
 ★Rompantoj, 5 monologoj.....0.40 (2)  
 ★Vojaĝo interne de mia Ĉambro.....0.30 (2)  
 ★La Vangoŝrapo 喜劇.....0.30 (2)  
 ★Bela Joe.....上製 2.65 (6) 並 1.85 (6)  
 ★Dormanto Vekiĝas 上 2.65 (8) 並 1.85 (6)  
 ★Tradukoj el Francaj Poezioj.....0.25 (2)  
 ★Tri Rakontoj, Tolstoj.....0.80 (2)

★Internacia Mondliteraturo 世界代表文藝叢書.....各號 0.70 (4)、倍號 1.40 (6)

1. Hermano kaj Doroteo  
 2. Legendoj, Niemojevski  
 3. Elekt. Noveloj, Turgenev  
 4. La Nigra Galero, Raabe  
 5. Camera Obscura  
 6. Skizlibro, W. Irving

7. Petro Schlemiel  
 8. Nuntempaj Rakontoj  
 9. Hebreaj Rakontoj  
 13. Ses Noveloj, Allan Poe  
 14. La Firmao, Balzac  
 15. Orientaj Fabeloj

16. Noveloj, Sienkiewicz  
 17. Insulo de Feliĉuloj  
 18. Barbaraj Prozajoj  
 19. Ano de P' Ringludo  
 20. Servokapablo!  
 21. Nobela Peko

★EBI 叢書.....各號 0.18 (2), 倍號 0.36 (2), 三倍號 0.54 (2)

Don Kiĥoto Servantes  
 Amoro kaj Psiĥe, Apulejus  
 Reaperantoj, Ibsen (倍號)  
 Komerca Korespondo 商業文  
 Konsiloj pri Higieno  
 Reĝo de Ora Rivero, Ruskin

Lasta Usonano, Mitchel  
 Hungaraj Rakontoj  
 Nordgermanaj Rakontoj  
 Instituto Milner 戀愛學校  
 Noveloj el Nigra Arbaro  
 Intervidiĝo

La Patrino, Ernst Zahn  
 Elzasaj Rakontoj  
 Sub la Neĝo (三倍號)  
 Amkonkurantoj, Schmidt  
 Japanaj Rakontoj, Ĉif (倍號)

~~~~~ 科學社會宗教其他 ~~~~~

★Laborĉarto 勞働大憲章.....0.12 (2)
 ★Artefarita Altmontarsuno.....0.10 (2)
 ★Kormalsanoj 心臟病.....0.40 (2)
 ★Evoluo de Telefonio.....0.55 (2)
 ★Komerca Vortaro.....1.00 (2)
 ★Franca Gramatiko.....0.35 (4)
 ★Evangeliio de Horo.....0.08 (2)

★Varmkulturo 熱療法.....0.45 (4)
 ★Monadologio de Leibniz.....0.15 (2)
 ★Teknika Vortareto 教育、心理學.....0.20 (2)
 ★Internacia Farmacio.....1.65 (18)
 ★Fundamento de Kvakerismo.....0.95 (6)
 ★Internacia Kantaro Tekstaro.....0.80 (2)
 ★音符:—La Espero.....0.15 (2)

本邦で出版の學會取次書其他目錄 (註文は前)(學會の振替口座は) (金に換る)(東京 11325 番)

| 價目 | 送金 | 價目 | 送金 |
|--------------------------------------|---|------------------|----------|
| ★ザ博士演説集…………… | 0.80 .4 | ★緑の星に憧れて…………… | 1.20 .8 |
| ★夜の空の星の如く (同上和譯) …… | 0.80 .6 | ★新覽王 (エス文) …… | 0.30 .2 |
| ★我國における外國語問題とエス語… | 0.60 .4 | ★悪夢 (エス文) …… | 0.20 .2 |
| ★カルロ (四方堂版) …… | 0.20 .2 | ★大成和エス辭典 …… | 4.80 .18 |
| ★心の片隅…………… | 0.50 .2 | ★模範エス會話…………… | 1.20 .4 |
| ★詩集花束…………… | 0.80 .4 | ★寡婦マルタ (改造文庫) …… | 0.30 .4 |
| ◆日本語エスペラント小辭典 (三高) [普及版] ((値下))…………… | 0.50 .2 | | |
| ◆模範エスペラント獨習 (秋田、小坂共著) [普及版] …… | 1.00 .8 | | |
| ◆日・エス・支・英 會話と辭書 …… | [普及版] 0.65 .6 [上製] 0.85 .6 | | |
| ◆エスペラント絹ハンケチ (高級刺繡) …… | 緑星光下の地球、旭昇る富士山の二種あり。
(男女別申出の事) 各 1 枚 75 錢送料各 2 錢 | | |

★JAPANAN LINGVON per “Romazi” (ローマ字宣傳の) 進呈 (15 枚毎に) (エス文小冊子) (郵券 2 錢)

★新撰エス和辭典附録 Kvara Oficiala Aldono 一覽表 (昨年度會員名簿第 27-) (郵券 2 錢) (28 頁へ收載せしもの) (送附の事)

★蓄音機レコード (小坂氏) 蓄音機會社合同等の目下品切中 (吹込) ため目下交渉中にて

★Heroldo de Esperanto (特別見本號) 一部送料共 12 錢

★Esperanto (U. E. A. 機關紙) 一部送料共 15 錢

KORESPONDA FAKO

★Japanujo:—Tecuro Ŭatanabe, 1822 Settaja, Koši-gun, Niigata-ken; nepre resp. PK. PI.

★Japanujo:—Tanji Nomijama; Takekura 211, Inaeki-poŝtoŝicej, Fukuoka-ken; dez. koresp. kĉl. junuloj.

★Japanujo: S-ro Ŝigesaburo Asala, ĉe Nagoja Tecudo-kjoku Annaiŝo, Hirokoĝi-dori, Nagoja; kun fervojistoj kaj vojaĝantoj.

★Ĉeĥoslovakujo:—S-ro Adolf Stratil, (bank-oficisto), Breclav; (Del. de U. E. A.) PI, L, interŝanĝi, monerojn ktp.

★Ĉeĥoslovakujo:—S-ro Anĉi Stratilova, Breclav; PI, L, interŝ. esp. glumarkojn, ekslibrisojn. ktp.

★Japanujo:—S-ro Meguru Takahaŝi, 1480 Kojuku Magome apud Tokio; PI, interŝ. esp. sigelmarkojn. 日本人とも.

★Koreujo:—S-ro Kjojeng Kim, Y. M. C. A. Chong No, Seoul, Koreujo; IP. L.

★Hungarujo:—D-ro Fulio Liptaku, Kp. Fötüzer, Nyiregyhaza. Kp. Iskola; 日本人と文通希望

★Hinujo:—S-ro Joŝio Oŭaki, ĉe Bank of Chosen, P. O. Box. No. 50 Tientsin; kĉl. interŝ. PI bildojn, fotografiaĵojn de belartaĵoj.

★Japanujo:—S-ro Masajoŝi Macuŝima, ĉe Nagoja-Ginko-Ŝiten, Muromaĉi, Kioto; kĉl. L. PI.

★Japanujo:—S-ro Masakazu Ma ujama, 547 Oŝiroi-maĉi, Matuzaka, Mie-ken; PI, G. fotograf. de literaturo.

★Japanujo:—S-ro A. Kanada, P. O. Box 1, Naogata, Fukuoka-ken; dez. interŝanĝi PI, PM, Moneroj antaŭ 1900; kĉl.

★Formoso:—S-ro Man'an Ŝa, Tamio 671 Kagi; koresp. pri religio (Kristanismo).

★Japanujo:—S-ro K. Muta; ĉe Takaŝimaja Departemento, Nagaboribaŝi - Minamizume, Osaka; kĉl.

★Germanujo:—S-ro Kurt Künzel, Leipzig—S. 3. Brandstr. 15 Germanujo.

四月の——新學期の

エスペラント講習には

初等講習用

エスペラント講習用書

小坂著 四六判 60頁 35錢(税2錢)

エスペラント短期講習書

學會編 菊判 40頁 20錢(税2錢)

エスペラント初等讀本

井上著 四六判 60頁 30錢(税2錢)

中等講習用

エスペラント中等讀本

四六判 60頁 30錢(税2錢)

骸骨の舞跳

菊半截 70頁 40錢(税2錢)

倫敦塔

菊半截 28頁 15錢(税2錢)

研究用書

エスペラント發音研究 .30\2}

リングヴィ・レスポンドイ .50\4}

愛の人ザメンホフ .80\6}

財團 日本エスペラント學會出版部
法人

東京牛込新小川町 振替東京11325番

EN LA MONDON

VENIS NOVA SENTO!!

エスペラントの學習は 今が好期です

講習用書

エスペラント捷徑

小坂著 1圓(税6錢)

エスペラント講座

學會編 50錢(税4錢)

學習用書

エスペラント對譯詳註双書

1. マテオ・フアルコネ
2. ハイネ詩集
3. 魔法使
4. 代理通譯
6. レイモント短篇集

(第一篇35錢其他各40錢各册税2錢)

カードと辭書

エスペラント單語カード

720枚 1圓70錢(税12錢)

エスペラント文例集

1圓70錢(税8錢)

新撰エス和辭典

75錢(税2錢)

La Revuo Orienta—Monata Organo de Japana Esperanto-Instituto,
Ŝin'ogaŭmaĉi III-15, Uŝigome, TOKIO, Japanujo; abono internacia 7 sviz. frankoj.

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財団法人 日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十五】【振替口座東京 11325 番】

- 目的** エスペラントの普及、研究、實用
- 事業** { (a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要と認むる事業
- 會費** { (a) 普通維持員 年額 2 圓 40 錢 (b) 正維持員 年額 3 圓
(c) 贊助維持員 年額 5 圓 (d) 特別維持員 年額 10 圓以上
(e) 終身維持員 一時金 100 圓以上
- 入會手續** { 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。(振替送金最も安全)
- 維持員の特典** { 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接お問合せ下さい

役員名簿 (五十音順)

| | | | | | | | |
|-----|--------|-----------|----|--------|-----------|-----|---------|
| 理事長 | 高層氣象臺長 | 大石和三郎 | 理事 | 文 博 | 高楠順次郎 | 理事 | 大 井 學 |
| 理事 | | 秋 田 雨 雀 | 同 | 東 朝 部長 | 土 岐 善 磨 | 同 | 三 石 五 六 |
| 同 | | 上 野 孝 男 | 同 | 醫 博 | 西 成 甫 | 監 事 | 農 學 校長 |
| 同 | 女大教授 | 河 崎 な つ | 同 | | 美 野 田 琢 磨 | 同 | 法 學 士 |
| 同 | 中大教授 | 川 原 次 吉 郎 | 同 | 醫 博 | 望 月 周 三 郎 | 顧問 | 法 博 男 爵 |
| 同 | 文 博 | 黒 板 勝 美 | 同 | 東 朝 顧問 | 柳 田 國 男 | 同 | 子 爵 |
| 同 | 専大教授 | 小 林 鐵 太 郎 | 同 | 鐵道技師 | 小 坂 狷 二 | | |

本誌購讀料 (郵税別)

| | | |
|-----|--------|-------------------|
| 一 部 | 圓 0.20 | 學會持維持員には
無代頒布す |
| 半年分 | 圓 1.20 | |
| 一年分 | 圓 2.40 | |

本會振替 { 一般 { 東京 11325 番
會計用 { 長 野 3283 番
口座番號 { 基本金専用東京 32089 番

昭和五年三月二十五日印刷

昭和五年 四 月 一 日 發行

編輯兼
發行人

東京市牛込區新小川町三ノ一五
大 井 學

印刷人

東京市神田區三崎町三ノ一四六
高 見 澤 保 芳
(一 国 印 刷 所)

發行所

東京市牛込區新小川町三ノ一五
財団法人 日本エスペラント學會

昭和五年四月一日發行 (毎月一回一日發行)
エスペラント研究雜誌「ラ・レヴ・オ・オリエンタ」第十一号第四號

定價貳拾錢 (送料貳錢)